

聖徒の道

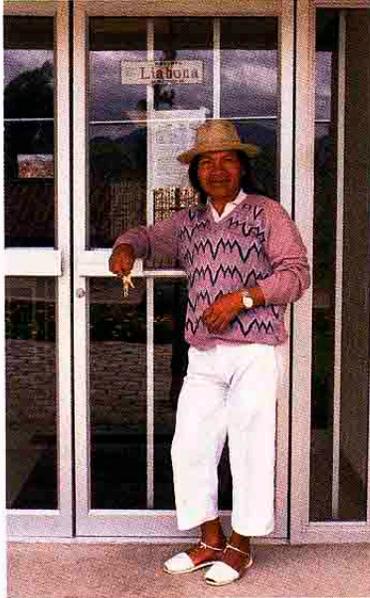
4
1993



末日聖徒
イエス・キリスト
教会

聖徒の道

1993年4月号



表紙——エクアドル・オタバロステキ部、インブラワード部のフランシスコ・カスタニエダ監督。同ワード部集会所の前で。ドアには、スペイン語版の教会機関誌「リアホナ」の購読を呼びかける掲示がはられている。(本誌「エクアドル」pp. 32-41参照。写真撮影ドン・L・サール)

こどものページ表紙——写真撮影メラニー・シャムウェー

一般

大管長会復活祭メッセージ	1
大管長会メッセージ——復活祭の意義 大管長エズラ・タフト・ベンソン	2
主を知る人々——キリストについて証する末日の予言者たち	6
最後の晩餐	12
主の恵み ジーン・R・クック長老	16
「もう少しも苦痛を覚えず」 クレイグ・A・カードン	22
キリスト 地上で教え導かれた最後の週 ギュスターブ・ドレの木版画	26
エクアドル ドン・L・サール	32
ウイルフォード・ウッドラフ——信仰と熱意の人 レオン・R・ハートショーン	42

青少年

父さんの死 パトリシア・R・ローパー	10
新たな方法 シャウナ・ロビンソン	20

定期特別記事

家庭訪問メッセージ 思いやり——真心と行ないで伝えるもの	25
---------------------------------------	----

こども

愛のおくり物 ジューン・ルイス・エルドリッジ	2
イエス・キリスト——すくいぬし、あがないぬし エズラ・タフト・ベンソン大かん長	4
ブランドンという名前の子ひつじ ルイス・J・ファンク	6
歌 しゆのこられるとき ムーラ・グリーンウッド・ザイン	8
いつもとはちがうイースター リンエット・K・アレン	10
分かち合いの時間——せかいのしんでん ジュディ・エドワーズ	12
たまごのメッセージ ペギー・ロジャーズ	14
おもちゃばこ	16

聖徒の道

1993年4月号

本誌は、末日聖徒イエス・キリスト教会の公式刊行物です。本誌は以下の言語で出版されています。月刊—イタリア語、英語、オランダ語、サモア語、スウェーデン語、スペイン語、中国語、韓国語、デンマーク語、ドイツ語、トンガ語、日本語、フィンランド語、フランス語、ポルトガル語、ノルウェー語。隔月刊—インドネシア語、タイ語、タヒチ語。季刊—アイスランド語。

大管長会：エズラ・タフト・ベンソン、ゴードン・B・ヒンクレイ、トーマス・S・モンソン
十二使徒定員会：ハワード・W・ハンター、ボイド・K・バック、マービン・J・アシントン、L・トム・ペリー、デビッド・B・ヘイト、ジェームズ・E・ファウスト、ニール・A・マックスウェル、ラッセル・M・ネルソン、ダリン・H・オーグス、M・ラッセル・バラード、ジョセフ・B・ワースリン、リチャード・G・スコット

顧問：レックス・D・ピネガー、ジョン・H・グロバーク、V・ダラス・メリル、ロバート・E・ウエルズ

編集長：レックス・D・ピネガー
教科課程管理部実務部長：ロナルド・L・ナイトン
教会機関誌ディレクター：トーマス・L・ピーターソン

国際機関誌

編集主幹：ブライアン・K・ケリー
編集主幹補佐：マービン・K・ガードナー
編集副主幹：デビッド・ミッチェル
編集補佐/こどものページ：ディエーン・ウォーカー

工程管理：トム・フォセット

チーフアートディレクター：M・マサト・カワサキ
アートディレクター：スコット・D・バン・カンペン
デザイナー：シェリー・クック

制作：レジナルド・J・クリステンセン、ステイブ・テイトン、ジェーン・アン・ケンプ、デニス・カービー

配送部長：ジョイス・ハンセン

聖徒の道 1993年4月号第37巻第4号

発行所 末日聖徒イエス・キリスト教会

〒106 東京都港区南麻布 5-10-30

電話 03-3440-2351

印刷所 株式会社 精興社/クロスロード

定価 年間予約/海外予約2,200円(送料共)

半年予約 1,100円(送料共)

普通号 150円、大会号 350円

Copyright © 1993 by The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints. All rights reserved. Printed in Japan. 英語版承認—1991年10月 翻訳承認—1991年10月 原題—International Magazine April 1993, Japanese. 93984 300.

●定期購読は、「聖徒の道」予約申し込み用紙、でお申し込みになるか、または現金書留か郵便振替(口座名/末日聖徒イエス・キリスト教会 振替口座番号/東京0-41512)にて管理本部経理課へご送金いただければ、直接郵送いたします。●「聖徒の道」のお申し込み先…〒106東京都港区南麻布5-10-30管理本部経理課 ☎03-3440-2351(代表) ●「聖徒の道」の配送についてのお問い合わせ…〒213川崎市高津区溝の口131/末日聖徒イエス・キリスト教会 資材管理部配送センター ☎044-811-0417

The Seito No Michi (ISSN 0385-7670) is published monthly by The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints, 50 East North Temple, Salt Lake City, Utah 84150. Second-class postage paid at Salt Lake City, UT 84150. Subscription price \$14.00 a year. \$1.50 per single copy. Thirty days' notice required for change of address. When ordering a change, include address label from a recent issue; changes cannot be made unless both the old address and the new are included. Send U.S.A. and Canadian subscriptions and queries to Church Magazines, 50 East North Temple Street, Salt Lake City, Utah 84150, U.S.A. Subscription information telephone number 801-240-2947.

POSTMASTER: Send address changes to Seito No Michi at 50 East North Temple Street, Salt Lake City, Utah 84150, U.S.A.

大管長会 復活祭 メッセージ

「主はよみがえられた。」第一の復活の朝、イエスの墓に下った天使のこの言葉は、末日聖徒イエス・キリスト教会から全人類に向けられた喜びのメッセージでもあります。

2,000年近く前のこの比類のない出来事を通して、すべての人に復活がもたらされました。「アダムにあってすべての人が死んでいるのと同じように、キリストにあってすべての人が生かされるのである。」(1コリント15:22)

私たちは、主イエス・キリストの^{あがな}贖いと復活を確信しています。「彼は十字架につけられ死して三日目にまたよみがえり」たもう(教義と聖約20:23)という人々の証に、私たち自身の厳粛な証をつけ加えます。主も次のように証されました。「わが父のわれをつかわしたまいしは、われが十字架にかけられて、……あらゆる人々をわれに引きよせんがためなり。また……御父〔は〕……これを各々の行い……に応じて裁判するためにわが前に立たせたもう。」(IIIニーファイ27:14)

復活祭のこの時期、皆さんが主の贖いの重要性に思いをはせるようお勧めします。主はまさによみがえり、御父と私たちとの仲保者となられたからです。□



復活祭の意義

大管長

エズラ・タフト・ベンソン

イエス・キリストへの信仰を失ったような時期は、私の記憶をいくらたどって見ても見当たりません。主の生涯と死、そして復活は、現実のものとして、常に私の心にあったように思います。深い信仰を持つ私の父と母は、キリストを心から信じ、キリストについて熱心に証していました。そのような両親の築く家庭で育ったことを、何よりも感謝しています。

歴史上最も大いなる出来事とは、最も多くの人々に、最も長い歳月にわたって影響を及ぼすものを指すのではないのでしょうか。この影響力の規模という基準で考えれば、一人一人の人間やさまざまな国民にとって主の復活に勝る出来事はあり得ません。

この世に生を受け、死んでいったあらゆる人々が文字どおり復活するのは、紛れもない事実です。だからこそ、人は自らの復活という出来事に対して心を尽くして備える必要があるのです。人は皆、栄光ある復活を目指して歩まなければなりません。復活は現実のものだからです。

すべての人に公平に機会が与えられるという点において、復活に勝るものはありません。すべての生きとし生ける者は復活します。「アダムにあってすべての人が死んでいるのと同じように、キリストにあってすべての人が生かされる」のです。(1コリント15:22)



私たちは、
全人類に与えられた
救い主の大いなる賜、
すなわち贖い^{あがな}を
思い起こしつつ
聖餐にあずかる。

PHOTOGRAPH BY
STEVE BUNDERSON; CHRIST IN GETHSEMANE,
BY HEINRICH HOFMANN

聖典には、イエスが十字架の刑をお受けになった後、3日目に大きな地震が起こったと記されています。墓の入り口の石が押しつけられていました。最も献身的だった主の弟子たちのうち、何人かの女性が香料を携えて墓に行ってみると、「主イエスのからだが見当りません。

すると、天使が現われ、簡潔な言葉でこう言いました。「あなたがたは、なぜ生きた方を死人の中にたずねているのか。そのかたは、ここにはおられない。よみがえられたのだ。」(ルカ24：3-6)「[主]は、ここにはおられない。よみがえられたのだ」というこの感動的な天使のみ告げに匹敵する言葉を、歴史の中に見だし得るでしょうか。

主の復活という事実は、数多くの信頼できる証人の証に裏付けされています。よみがえられた主は幾人かの女性の前にみ姿を示され、続いてエマオに向かう道でふたりの弟子を、そしてペテロを、使徒たちを訪れられました。「そののち」パウロが記しているように「五百人以上の兄弟たちに、同時に現れ……最後に、[パウロ]にも、現れた」のです。(Iコリント15：6、8)

復活の後、40日間にわたって、主はここかしこにご自身を現わされ、神の王国に関する導きをお与えになりました。この時の主のみ言葉やみ業の多くは記されていません。しかし、聖典に残された記述は、ヨハネが明言しているように「[私たち]がイエスは神の子キリストであると信じるためであり、また、そう信じて、イエスの名によって命を得るため」(ヨハネ20：31。下線付加)にあるのです。

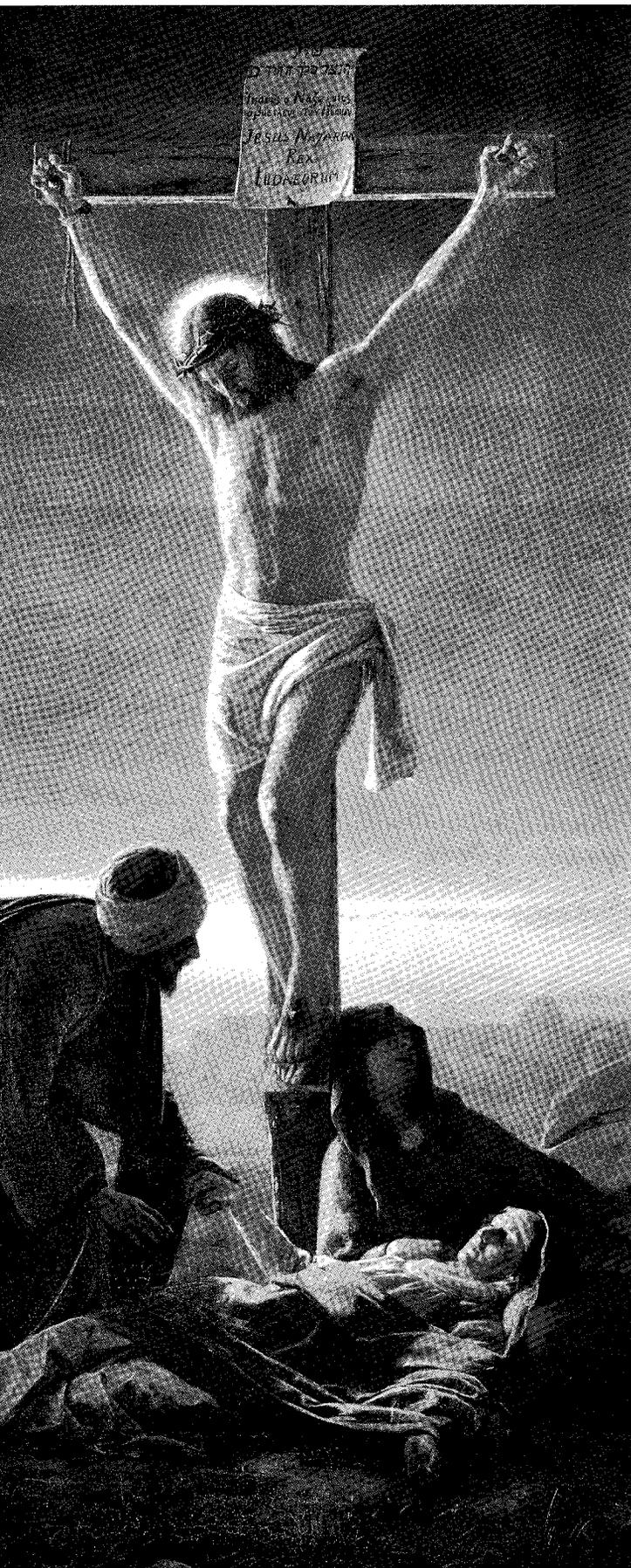
救い主は弟子たちに、ご自身が間もなく天の御父のみ

もとに昇っていかなければならないことを告げられました。やがて昇天される時が近づき、主は最後に厳粛な面持ちで弟子たちと語られ、別れに際して訓戒をお与えになりました。

キリストは、弟子たちとともに「ベタニヤの近くまで」来られました。そこはマリヤとマルタ、そしてラザロが住んでいた所です。主は「手をあげて彼らを祝福され」(ルカ24：50)ました。語り終えられると、天に上げられ、雲に迎えられて、その姿が見えなくなりました。(使徒1：9参照)使徒たちが天を見つめて立っていると、白い衣を着たふたりの人が現われて、集まっていた彼らにこう言いました。「ガリラヤの人たちよ、なぜ天を仰いで立っているのか。あなたがたを離れて天に上げられたこのイエスは、天に上って行かれるのをあなたがたが見たのと同じ有様で、またおいでになるであろう。」(使徒1：11)

使徒たちは、敬虔な思いと大きな喜びに満たされて、エルサレムに戻りました。主の昇天が成就した今、弟子たちは主の最後のみ言葉の意味を、さらにはっきりと理解し始めたのです。「勇気を出しなさい。わたしはすでに世に勝っている。」(ヨハネ16：33)キリストによって、墓はもはや永遠の勝利を収めることができなくなりました。死は克服されたのです。

モルモン経に記されたところによれば、主は天に昇られた後、アメリカ大陸の人々にみ姿を現わされました。さらに近代にあって、予言者ジョセフ・スミスは次のような言葉で、世の贖い主の訪れについて証を述べています。「さて、この子羊に就きて為されたる様々の証の挙句、



「主の末日の証し人のひとりとして、
私も、今日主が生きておられることを証します。
主は復活されたお方です。
主なる救い主であり、
まことに神の御子なのです。」

われらの為す最後の証はすなわち『主は実に生きたもう』こと^{これ}是なり。われらは、彼……を見たり。」(教義と聖約76：22-23)

主の末日の証し人のひとりとして、私も、今日主が生きておられることを証します。主は復活されたお方です。主なる救い主であり、まことに神の御子なのです。このお方は栄光を身にまとい、復活された主として再臨されることを証します。再臨の日はそう遠くありません。キリストを主なる救い主として受け入れるすべての人々にとって、主の文字どおりの復活は、人の命は死をもって終わりを告げるものではないことを意味しています。主がこう約束しておられるからです。「わたしが生きるの、あなたがたも生きるからである。」(ヨハネ14：19)

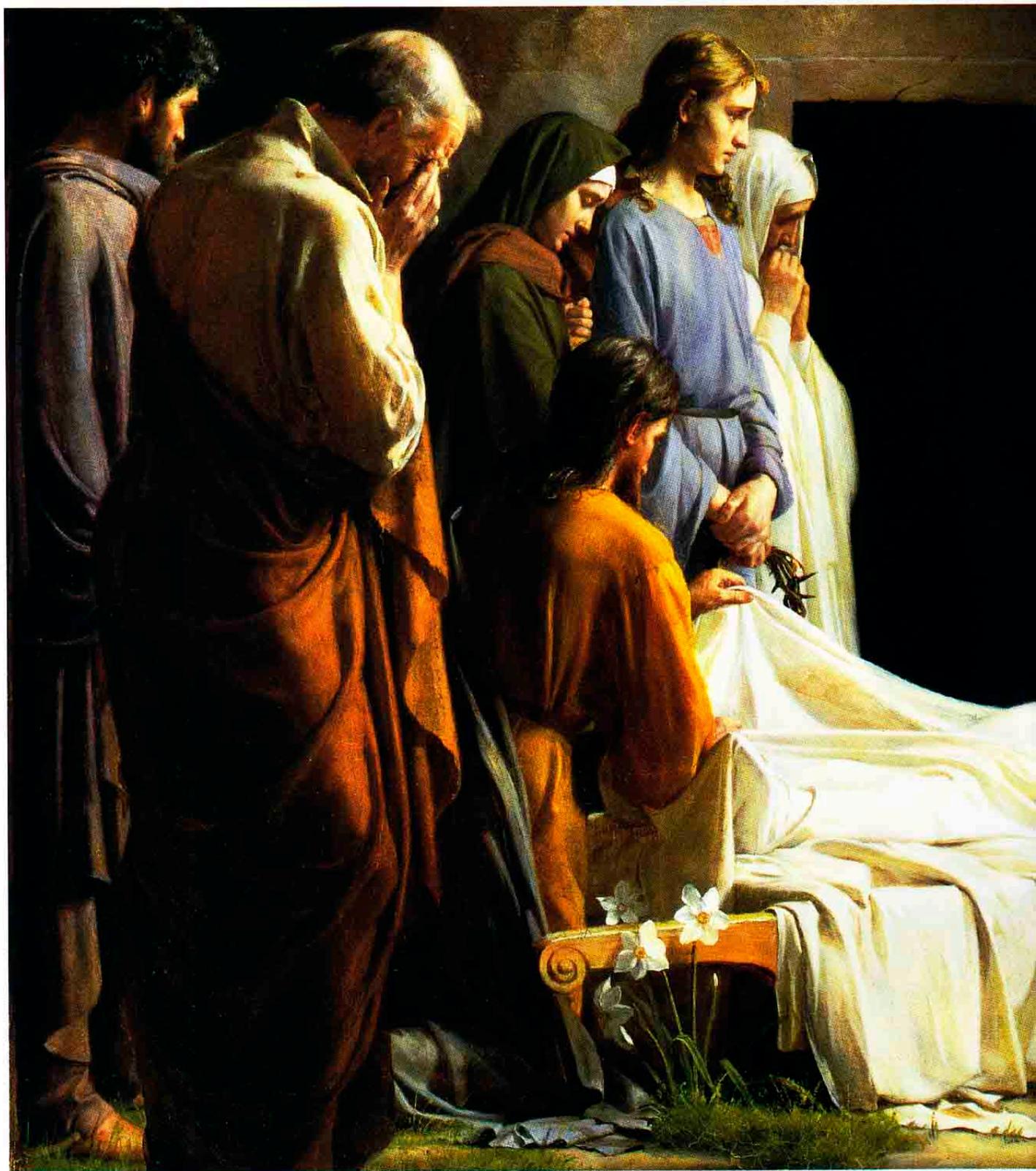
□

話し合いのポイント

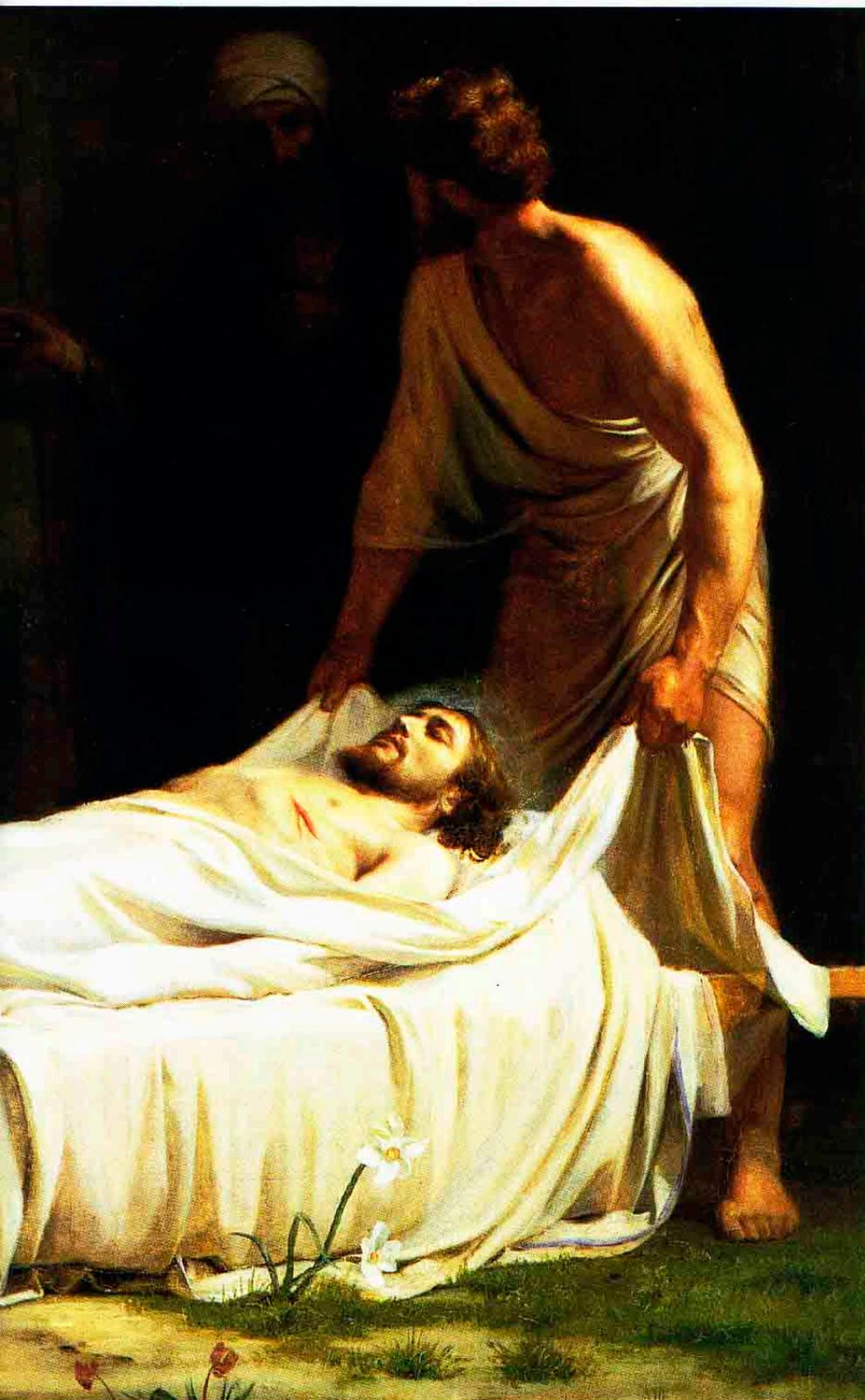
1. この世に生を受け、死んでいったあらゆる人々が文字どおり復活するのは、紛れもない事実である。
2. 主の復活という事実は、数多くの信頼できる証人の証、すなわち、新約聖書、モルモン経、教義と聖約に記された証に裏付けされている。
3. ベンソン大管長は次のように証している。「主の末日の証し人のひとりとして、私も、今日主が生きておられることを証します。主は復活されたお方です。」
4. 私たちは自らの復活という出来事に対して、心を尽くして備える必要がある。人は皆、栄光ある復活を目指して歩まなければならない。

主を知る人々

キリストについて



証する末日の予言者たち



ジョセフ・
スミス

「私たちの宗教の根本原則は、イエス・キリストが亡くなって葬られ、3日目によみがえって天に昇られたことについて、使徒と予言者の立てる証です。私たちの宗教のそのほかのことはすべて、この証に付随するものにすぎません。」¹

ブリガム・ヤング——「この世のいかなる知恵をもってしても、私たちが贖^{あがな}われて御父と長兄のみ前に帰り、聖なる天使や日の栄の住人とともに住む手段を考えつくことはできないでしょう。神に対する負債に見合う犠牲を用意し、捧^{ささ}げることが、……地の住民の知恵と能力を超えたものです。しかし神にはそれがおできになりました。その御子が犠牲を払われたのです。」²

ジョン・テイラー——「主は、人の子として、血肉を持てる身で耐え得るあらゆる苦痛を堪え忍ばれました。また、神の子として、すべてに打ち勝ち、天に昇り、永遠に神の右に座しておられるのです。」³

ウィルフォード・ウッドラフ——「十字架につけられたイエスの霊は、うちひしがれた肉体を離れたその瞬間にも、神の王国の鍵^{かぎ}を有しておられました。この鍵に伴う力と権威、栄光は、イエスの霊がその肉体の内であったときとまったく同じものでした。」⁴

ロレンゾ・スノー——「神のみたまが私の上に降^{くだ}り、私は頭のとっぺんからつま先まで全身くまなく神のみたまに満たされました。……そして、歴史的に私たちに伝わっている『ベツレヘムの幼な子』が真に神の御子であるということ……に対する疑いや恐れは、私にこの理性と記憶がとどまる限り、永遠に私の中からぬぐい去られたのです。」⁵

ジョセフ・F・スミス——「キリストは、まことに私の救い主であり、全人類の救い主です。私たちが救われるように、自らの命を捧げ、死の縄目を断ち切ってください、……また自分こそ救いの道であり、世の光明^{ひかり}、世の生命^{いのち}(教義と聖約12：9参照)であると宣言されました。私はその言葉を心から信じています。」⁶

ヒーバー・J・グラント——「イエス・キリストがこの世に来られたのは、万物の救い主としてだけでなく、私たち一人一人にみこころを伝えるためです。……そして、その血は私たちをある条件の下で救ってくださるのです。国家や地域社会、あるいはグループとしてではなく、個人として私たちは救われるのです。」⁷

ジョージ・アルバート・スミス——「私は、わが身を支えられました。言い換えるならば、何者かに引き上げられ、世の贖^{あがな}い主の宣べ伝えられた栄えある真理を教える特別な力を授けられたのです。私は、主と顔を合わせて相見^{あひま}たことはありませんが、……はつきりと間違いなく、その存在を感じたことがあります。私は、贖^{あがな}い主が生きておられることを知っています。」⁸

デビッド・O・マッケイ——「キリストの教会の会員には、罪なき『人の子』を理想とする義務があります。キ

リストはこの地上に生きた唯一^{まっただ}の完きお方であり、高潔の最大の模範であり、神のごとき特質^{まっただ}を有し、完き愛を備えたお方です。」⁹

ジョセフ・フィールディング・スミス——「私たちが、ほかの何にも増して愛すべきお方はどなたでしょうか。……それは主なる救い主イエス・キリストです。私たちは、自分の命よりも、自分の父母や子供よりも主を愛すべきです。……なぜなら、主の祝福なくして、私たちは何も所有することができないからです。」¹⁰

ハロルド・B・リー——「聖霊の力により、また心からへりくだって、厳かな気持ちで全世界に証します。神は確かに生きておられます。神の御子イエス・キリストは肉体をとってこられ(1ヨハネ4：2参照)、十字架につけられ、骨肉の体をもって墓の中からよみがえり、今日、人類の裁き主、助け主として神の右に座しておられます。」¹¹

スペンサー・W・キンボール——「人々が顔につばを吐きかけたときも、イエスは気持ちを抑えて、静かに威厳を保って立っておられました。終始心穏やかでした。人々はイエスにつらく当たりました。しかし、イエスの口から怒りの言葉は何ひとつ出ませんでした。人々はイエスの顔や体を打ちました。それでもなお、イエスはおびえることなく、確固として立っておられました。……

イエスは『敵を愛せよ』(マタイ5：44参照)とされました。いまやイエスは、人が自分の敵をどれだけ愛せるものかを示してくださいました。イエスは、ご自身をくぎで打ちつけた人々のために、十字架にかかれたのです。」¹²□

1. 「教会歴史」3：30
2. 「ブリガム・ヤング説教集」ジョン・A・ウィッツォー編、p. 59
3. 「瞑想と贖^{あがな}い」p. 151
4. 「ウィルフォード・ウッドラフ説教集」G・ホーマー・ダラム編、p. 27
5. プレストン・ニプレー「歴代大管長」p. 140
6. 「インブルーメント・エラ」1906年8月号、p. 806
7. 「ジュブナイル・インストラクター」1929年12月号、p. 697
8. 「指導者の証」フローレイス・グリーン編、p. 47
9. 「生涯の宝」クレアー・ミドルミス編、p. 210
10. ジョセフ・フィールディング・スミス Jr. 「みずからを心に留める」p. 296
11. 「世の光となる」p. 243
12. 「エンサイン」1980年12月号、pp. 6-8
13. 「エンサイン」1990年6月号、p. 6



エズラ・
タフト・
ベンソン

「私は全身全霊を込めて、イエスを愛しています。
私はへりくだって証します。
イエスは今でも、パレスチナのほこりだらけの道を歩まれたときと同じように、愛と恵みに満ちた主です。そして地上の僕たちと親しく交わっておられます。私たち一人一人のことを心にかけて、愛しておられます。これは確かなことです。」¹³

父さんの死

パトリア・R・ローパー

PHOTOGRAPH BY MELANIE SHUMWAY



母さんは父さんに付き添って、夜遅くまで病院に行っていました。母さんによると、医者も父さんのどこが悪いのか判断できないらしいのです。明日まで待つ様子を見るしかありません。

寝る前に、母さんはもう一度病院に電話して、父さんの容体を聞きました。看護婦は、緊急の患者がいるので、少ししたら電話をかけ直すと言いました。その時は知りませんでした。その患者というのは、父さんのことだったのです。

やがて看護婦から電話があり、母さんにすぐに病院へ来るように言いました。兄のルイスと妹のレベッカと一緒に行くと言っています。疲れていた私は、不安な気持ちのまま寝る仕度にかかりました。しかし、横になるとみたまがささやきました。「起きて、行きなさい。」

私はこの声を無視しました。すると、今度はもっと強くみたまの促しを受けたのです。私はその声に従うことにしました。私たちが病院に着くと、母さんが言いました。「集中治療室に行つて父さんの様子を見て来るわ。すぐ戻るから。」

だいぶ時間がたってから、やっと母さんが出て来て言いました。「今の父さんをあなたたちには見せられないわ。父さんも、あなたたちに見られるのはつらいと思うの。」

私たちは大声で抗議しましたが、母さんは聞き入れてくれませんでした。「だめよ。いつもの父さんを覚えていて。」

「きっと母さんは、父さんが死にそうだって言えなかったんだわ。」そう思うと、怖くなってすっかり取り乱してしまいました。その時、テーブルの上の聖書に気づきました。手に取つて読み始めると、私の目はある一節に引き寄せられました。

「わたしは、これら二つのものの間に板ばさみになっている。わたしの願いを言えば、この世を去つてキリストと共にいることであり、実は、その方がはるかに望ましい。」(ピリピ1:23)

読み終わったとき、父さんはこの世を去らなくてはな

父さんが真っ白い服を着て戸口に立っている夢を見ました。父さんは涙を流してはいましたが、とても安らかな表情をしていました。そして「さよなら、子供たち」と言いました。

らないのだとわかりました。ルイスは待合室ですすり泣いていました。妹のレベッカは、ルイスが泣いているのを見るのがどんなにつらいか、また、病院にいるのに父さんに会えないのがどんなに悲しいか、話しかけてきます。そして姉のメアリーアンとふたりの兄弟カールとマイケルは家に残つて、母さんからの知らせを今か今かと待っているのです。こんな悲しい知らせがあるのでしょうか。

涙がかけられるほど泣いた私たちは、皆ソファに座つてうとうとしていました。その時、こう思ったのを覚えています。「こんな形で父さんが死んでしまうはずないわ。何かが起こつて、私たちと別れるのはつらいという父さんの気持ちを伝えてくれて、これから先の心の支えとなるような慰めが与えられるはずよ。」

私は眠りに落ちると、父さんが真っ白い服を着て戸口に立っている夢を見ました。父さんは涙を流してはいましたが、とても安らかな表情をしていました。そして手を上げて、「さよなら、子供たち」と言いました。

私は父さんに行かないでほしいと願いましたが、突然目が覚めたときには、もう父さんはいませんでした。その夜遅く、父さんは亡くなりました。

次の朝、自分のベッドで目を覚ました私は、知り合いの人が私たちを病院から家まで送つてくれたことをうつつらと思ひ出しました。ベッドの上で起き上がつて周りを見渡すと、何かいつもと違ふと感じ、やがて父さんが昨夜亡くなったことを思い出しました。私は涙でぬれたまくらに倒れ込むと、もう一度泣きました。

一番つらかったのは、お葬式の後の数日でした。テーブルに7枚だけお皿を並べること、夜、母さんがそっと泣いているのを聞くこと、父さんのいすが空なのを見ることなど、すべてがつらかったのです。私の大好きだった父さんはどこにいらっしゃるのでしょうか。その時です。私は父さんが涙を流しながら別れを告げた夢とあの聖句を思い出しました。

「わたしの願いを言えば、この世を去つてキリストと共にいることであり、実は、その方がはるかに望ましい。」

そうです。私たちが必要とするときには、父さんはいつても霊の状態ですばにいてくれるし、父さんとの思い出は私たちに大きな慰めをもたらしてくれるのです。そして、父さんがキリストとともにいると思うと悲しみは和らげられました。□



最後の晩餐^{ばんさん}

「時間になったので、イエスは食卓につかれ、使徒たちも共に席についた。……またパンを取り、感謝してこれをさき、弟子たちに与えて言われた、『これは、あなたがたのために与えるわたしのからだである。わたしを記念するため、このように行いなさい。』食事ののち、杯も同じ様に^{さかずき}して言われた、『この杯は、あなたがたのために流すわたしの血で立てられる新しい契約である。しかし、そこに、わたしを裏切る者が、わたしと一緒に食卓に手を置いている。』……弟子たち



PHOTOGRAPHY BY MELANIE SHUMWAY

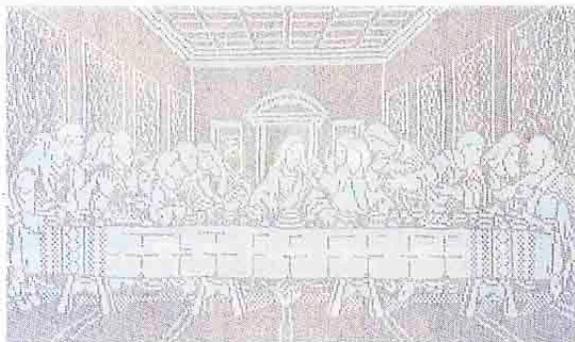
は、自分たちのうちのだれが、そんな事をしようとしているのだらうと、互^{たがい}に論じはじめた。」
(ルカ22：14-23参照) ❀ だれかが裏切るだらうという救い主の言葉に、使徒たちは当惑しま
した。その場面は、今日に至るまで、多くの芸術
家たちによって、さまざまな手法で表現されてき
ました。❀ 右——15世紀に描かれたレオナル
ド・ダ・ビンチの有名な絵画。何人もの芸術家が
この絵を模写しています。❀ 上——細かい装
飾の施された磁器。1985年にイタリアで作られま





した。これは数少ない作品のうちの一つです。幅100センチ、高さ38センチ、奥行40センチ。

❁ 下——このかぎ針編みの作品は、ユタ州ミッドベイルの芸術家、ビーダ・アンドレーセンに



よるものです。制作年数10年。縦152センチ、横

183センチ。❁ 上——ナバホインディアン

の芸術家であり、帰還宣教師でもあるハリソン・ビ

ーゲイ Jr. 兄弟はニューメキシコ州サンタクララ

出身。最後の晩餐の劇的瞬間を粘土で表現してい

ます。一つ一つが砥石といしを使って磨かれています。



微妙な顔の表情や手のしぐさを表現するために、磨きをかけない部分も残してあります。❁ 右——ダ・ビンチの傑作を基にして作った紙と絹の壁掛け。台湾の台北市タイペイに住む教会員、チャン・ユンツー姉妹の作品。全長114センチ。❁ ここに紹介した現代の作品は、すべてユタ州ソルトレークシティの教会歴史美術館に所蔵されています。□





主の恵み

七十人
ジーン・R・クック長老

復活祭を祝うに際して、私たちの望みをさらに一層イエス・キリストに向けること以上に輝かしい方法はありません。

友人でもあるひとりの青年が面接を受けに来ました。そして、「自分は罪を犯しています」と、ささいな取るに足りない問題を打ち明けました。青年はその問題を、とても重大な罪だと思っていたのです。「自分は弱点を克服する力もないつまらない人間だ」と、サタンが思い込ませようとするに任せていたのです。人生につきものの問題や試練にすっかり押しつぶされ、イエス・キリストの真の弟子ならだれでも感じられるはずの心の平安をなくしていたのです。

「わかっているんです。キリストの使命は人を罪から救うことでしょう。でも、それ以外の問題についてはどうなんですか。」

私は彼の心を和らげようとして、こう話しました。「キリストが遣わされたのは、罪を犯して傷ついた者を癒すためだけでなく、私たちの悩みや悲しみを担い、良心のとがめを除いてくださる(モーサヤ14：4—5, 11；アルマ24：10参照)ためでもあるんだ。そればかりか、『苦難とあらゆる誘惑である試みとを受け』、『その民の……病い』を引き受け、『その民を縛る……縄目を解くために……死を受け』、また『その民を救う方法を知るために民と同じく虚弱を』受けるためでもあったんだよ。」(アルマ7：11—12参照。下線付加)

ふたりで聖典を読んでいくうちに青年は、キリストがいわゆる罪だけでなく、悩みや悲しみ、死、病、不安、罪悪感、苦しみまでも引き受けてくださるお方であることを悟り、感激したようでした。事実、イエス・キリストは、私たちが日常直面する問題や苦難を引き受ける力を持っておられます。これは実に素晴らしいことです。主は、私たちが裁きの日に救われるよう助けてくださるだけではありません。私たちが霊性を高め、御父や御子と交われるよう努めるなら、おふた方は日々の試練に打ち勝てるよう力を与えてくださるのです。

この能力、すなわち神の愛によって世の試練に打ち勝つ力を表わす言葉として聖典で用いられているのが、主の恵みという言葉です。この言葉はなかなか定義しにくいのですが、私の知る限り最も適切と思われるのは、「天与の力」、つまりあらゆることを成し遂げるために主より授けられた力という定義です。確かに主は喜んで恵みを授けてくださいますが、同時に、恵みに恵みを加えて成長するようにも命じておられます。(教義と聖約93：1—20参照)

私は、次のような聖句に深く心を打たれました。「主の慈み深き親切と、主の善によりまた主の慈み深き親切によりて与えられたることごとくのものごとを挙げて永遠に語るべきなり。

主は、あらゆる彼らの艱難をなやめり。而して、主の前にある天使彼らを救えり。また、愛をもて愛憐をもて主は彼らを贖い、およそ昔の時始終彼らを背負い彼らを連れ歩きたまえり。」(教義と聖約133：52—53)

確かに主は、私たちが悩むたびにともに悩み、天使を送ってくださいます。また、私たちが気づいているか否かにかかわらず、日々愛をもって助けてくださるのです。私たちは、御父と御子の恵みに絶えず心からの感謝を捧げるべきではないでしょうか。

おそらく、私の若い友人がそうであったように、この天与の力、すなわち主の恵みを生活の中で享受することがどんなに力強い祝福となるか、初めは理解できない人があるかもしれません。しかし、人を主の恵みに導く原則に従って生活していくならば、ますます理解を深めていくことができるでしょう。ここでその原則について4つの面から考えてみましょう。

1. 主イエス・キリストを信じる信仰

ペテロが水の上を歩いていておぼれかけたとき、キリストは、はっきりとこう言われました。「信仰の薄い者よ、なぜ疑ったのか。」(マタイ14:31)

疑いを抱いたその瞬間、ペテロは水の上を歩く自分を支えていた力をみずから絶ったのです。私たちは、助けを願い求めながらも、時折、疑いや恐れのために神の力

を断ち切ってしまうことはないでしょうか。

一方、主は信仰がもたらす素晴らしい結果について明らかにしておられます。「このように、わたしたちは、信仰によって義とされたのだから、わたしたちの主イエス・キリストにより、神に対して平和を得ている。

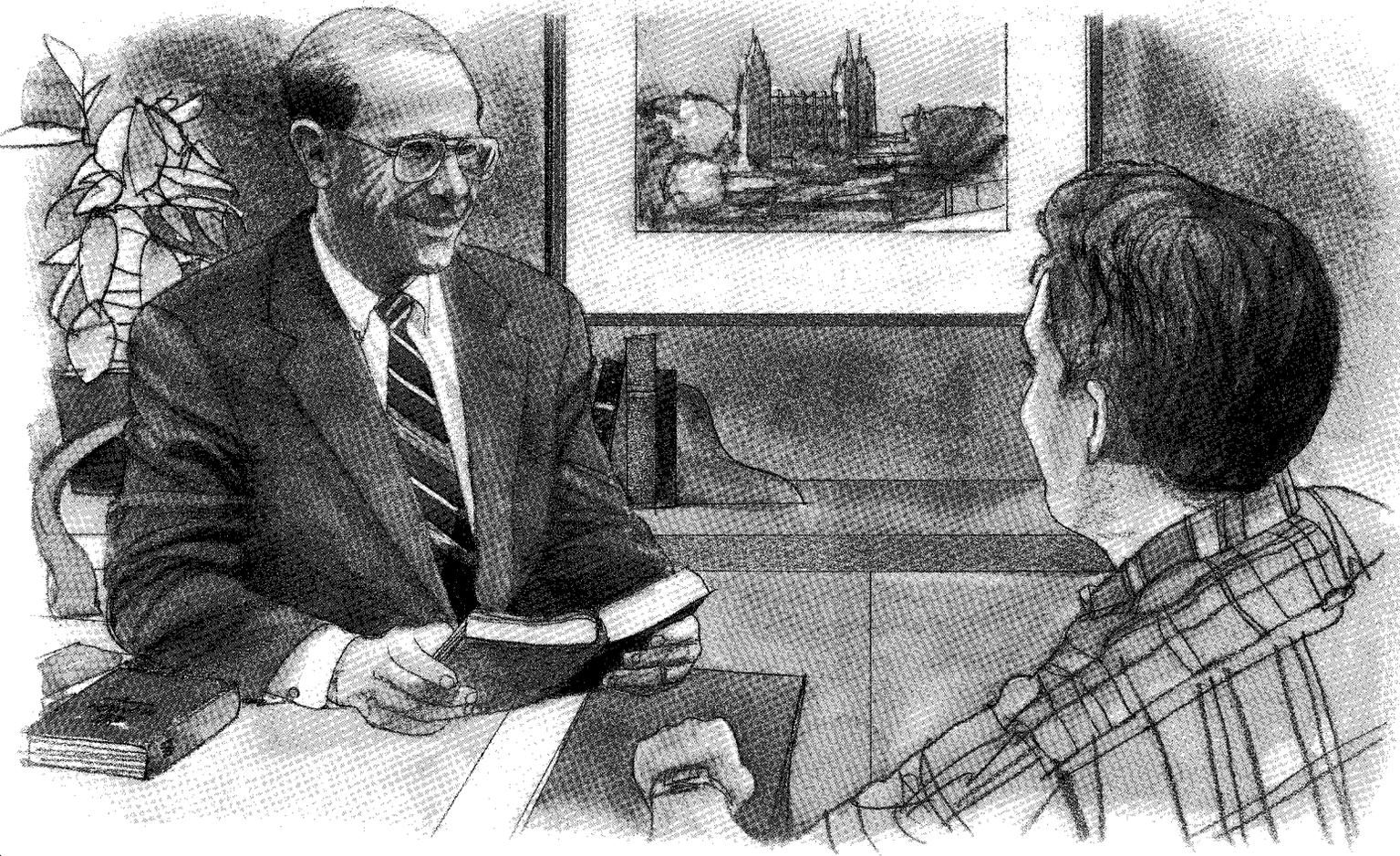
わたしたちは、さらに彼により、いま立っているこの恵みに信仰によって導き入れられ、そして、神の栄光にあずかる希望をもって喜んでいる。」(ローマ5:1-2。下線付加)

2. 悔い改めの心を伴う謙虚さ

「神は高ぶる者をしりぞけ、へりくだる者に恵みを賜う」(ヤコブの手紙4:6。下線付加)とあります。

主は別の聖句でも同じ原則を教えておられます。「も

ふたりで聖典を読んでいくうちに青年は、キリストがいわゆる罪だけでなく、悩みや悲しみ、死、病、不安、罪悪感、苦しみまでも引き受けてくださるお方であることを悟り、感激したようだった。



し人われに来らば、われはかれにその弱点を認めさせん。見よ、われは人を謙遜にするために人に弱点を与うれど、すべてわが前にへりくだる者には充分わが恵みを授くるにより、かれらがわが前にへりくだりわれを信ずる時にはその弱きを強きに変えん。」(イテル12:27。下線付加)

へりくだり、罪を悔い改めることによって、私たちはキリストを自らの生活に招き入れ、霊を奮い立たせ、また人生の苦難に対処する力を得るのです。しかしそれと同時に、あらゆる面で主のみこころに喜んで従う姿勢も身につけていかななくてはなりません。

私の友人がぶつかった問題は、決してまれなものではありません。「自分たちは教会員だから、そういう試練は免れる。」ときに私たち末日聖徒はこのような考えに陥ってしまいがちです。しかし、私の経験から言うと、教会員であっても、一般の人々を上回ることはないかもしれませんが、同じくらい多くの試しは受けていると思います。なぜでしょうか。それは主が教会員を愛しておられるからです。

教義と聖約第95章1節から2節に至る言葉が、それを如実に語っています。「汝らの罪赦されんために、愛する汝らをまた懲しむるなり。そは、懲しめとともに汝らがすべてに於て誘惑より免るる様われ一つの途を備うる故にして、われもとより汝らを愛す。

この故に汝らすべからく懲しめを受け……ざるべからず。」

主が私たちに懲らしめられる神聖な理由は、私たちに罪の赦しを得させるためなのです。主は私を救うために常にひとつの道を備えておられます。試練のただ中であって、私はその道に気づかなかつたかもしれません。しかし、その間も主はずっと私に愛を注いでおられたのです。そのことを思うと喜びに満たされます。

主はまた、神の恵みを得るうえで悔い改めが重要な役割を果たすことを強調しておられます。

「願わくは、神がその完全な大きな道を以て、人に悔改めと善とを行うことを得させて、それぞれの行いに従ってその善い行いに応ずる報いを受けさせたまわんことを。」(ヒラマン12:24。下線付加)

主の恵みという天与の力を賜わるには悔い改めが必要です。確かに人は皆、絶えず悔い改めなければならないのです。

悔い改めようとする人々に主はこう言っておられます。「犠牲としてわれに捧ぐべきものは、真にへりくだる心

と悔いる精神なり。……

この故に、悔い改めて幼児のごとくわれに来る者は、われことごとくこれを受け容るべし。……故に、世界の隅々に至る者たちよ。悔改めをなし、われに來りて救いを受けよ。」(IIIニーフアイ9:20, 22)

3. 犠牲を払い、できる限りのことをする

人は、自分にできる限りのことをしなければなりません。そうして初めて、神の恵みがその人の生活に作用し始めるのです。

「だから私たちが力をつくして書き記すのは、自分たちの子孫と兄弟たちを説得してキリストを信じさせ、神との一致を得させるためであり、それは人が最善をつくしてはじめて、神のめぐみにより救われることを知っているからである。」(IIニーフアイ25:23。下線付加)

なんとすばらしい原則でしょうか。主の助けは、老若男女、信仰の強弱に関係なく、その人の知識によるのも、ましてや主に何を捧げたかによって与えられるのでもありません。その人が今置かれている状況の中で最善を尽くしたかどうかによって与えられるのです。

4. 戒めに従う

戒めを守りなさいという聖句はたくさんあります。私たちは、祈りの答えを受けるために今すぐ完全な人となる必要はありません。しかし、謙遜な心で、最善を尽くして戒めを守るよう努めなければなりません。そうして初めて主は助けてくださるのです。

「もし汝らわが誠命を守らば、御父の完きを受け、わが御父に於ける如く、汝らわれにありて榮を得べし。この故に汝らに告ぐ、汝ら恩恵に恩恵を加えらるべし、と。……

彼の誠命を守る人は真理と光とを受け、ついに真理によりて榮光を得て、すべての事物を知る。」(教義と聖約93:20, 28。下線付加)

主の祝福があって、私たちが復活祭の真の意義に深く思いを巡らし、御子を通してもたらされた大いなる賜をより完全に悟ることができますように。私たちの望みをひたすらイエス・キリストに向けること以上に復活祭にふさわしい願いはありません。イエス・キリストは実にごう言っておられます。「わたしは戸の外に立って、たたいている。だれでもわたしの声を聞いて戸をあけるなら、わたしはその中にはいって彼と食を共にし、彼もまたわたしと食を共にするであろう。」(黙示3:20)□

新たな方法

私は自分自身の証を得る決心をしました。

シャウナ・ロビンソン

高校生の時、私はいつまでも両親の証に頼らないで、もうそろそろ自分自身の証を得ようと決心しました。

でも、どうしたらよいかわかりません。そこで、ある晩ベッドのわきにひざまずいて祈り、福音が真実であるかどうか教えてくださいと、主に尋ねました。そしてすぐベッドに入り、寝てしまいました。

翌日、そしてその後数日にわたって同じことを繰り返しました。言うまでもなく、証は得られませんでした。そこで私は別の方法を試してみました。ただ祈ってベッドに入るのではなく、祈った後ひざまずいたまま答えが来るのを待つことにしたのです。でも、答えは得られませんでした。

何かしなければ、と思いました。その時ちょうどモルモン経を読み終わったところでしたが、モルモン経の中に出てくる人物は皆、絶えず証を得ていました。私に答えが与えられないのは不公平だわ。どこか間違っているのかしら。そう思いました。

ある晩、教義と聖約を読んでいると、第9章7節に次のように書かれていました。「見よ、^{なんじ}汝はまだ悟らず。汝はひたすらわれに願ひし時はこれを与えらるるならんと思えり。」

私は、まったく間違った方法で証を得ようとしていたことに気づきました。ただ与えられるのを期待するのではなく、自分から探し求める必要があったのです。

それから、証というテーマに関する参照聖句をできる限り調べました。また、証について監督や両親をはじめいろいろな人と話をしました。

研究と断食の後、真理を知ることができるように主に祈り求めました。こうして私の証は成長し始めたのです。

しかし、最初の祈りがこたえられなかったと思ったのは間違いでした。教義と聖約第9章7節は私の祈りに対する答えだったのです。それは証ではありませんでした。自分で証を見いだす方法を教えてくれたのです。□







「もう少しも 苦痛を 覚えず」

クレイグ・A・カードン

「どうして私は自分の罪をまだ忘れられずにいるのでしょうか。」私のオフィスで、ある女性がこう尋ねました。彼女はいかにもつらそうでしたが、なんとかその理由を知りたいと強く願っていました。

当時、私は伝道部長として働いており、この姉妹は長年悩み続けてきた問題を解決するために私の助言を求めて訪ねて来ていたのです。

彼女の話によれば、何年前にある重大な罪を犯してしまい、その後、適切な神権指導者にきちんと告白し、主や教会、関係した人々から赦しを受けられるよう、あらゆる勧告に従ったということでした。彼女は自分の生活を一変させ、今では戒めにみな従っていました。ところが、昔犯した過ちのことが、今でも折に触れて頭に浮かんでくるといいます。

「悔い改めるなら、私たちは赦しを受け、主は私たちの罪を忘れてくださる、と言っておられます。それなのに、

.....

息子アルマのように、私たちが自分の犯した罪を思い起こして責め苦しめられたとしても、救い主の贖いによってその苦痛を取り除くことができる。

思いやり——真心と行ないで伝えるもの

聖典には、息子を亡くして悲しみに打ちひしがれているやもめにイエスは「深い同情を寄せられ」（ルカ7：13）、すぐに死んだ息子をよみがえらせたことと記されています。思いやりはキリストのような愛のひとつの重要な一面です。それは相手を感じていることを感じ取り、助ける能力です。

パウロは心がひとつに結ばれた聖徒たちをこのように描写しています。「もし一つの肢体が悩めば、ほかの肢体もみな共に悩み、一つの肢体が尊ばれると、ほかの肢体もみな共に喜ぶ。」（Iコリント12：26）

相手の話に耳を傾け、 相手の立場になることにより助ける

思いやりの心を持つ人は、相手の悲しみや喜びをともに感じようと努めるものです。相手が苦しんでいるときは、その話を聞くのをつらく感じることもあります。また、その人の苦痛を取り去るために自分は何もできないと思うこともよくあります。しかしそのような場合にも、ただ相手の話を聞くだけで心からの同情を表わすことができるのです。

年若くして奥さんを亡くしたある人は、このような形の思いやりが何よりも必要だと語っています。「『それを見ると〔妻〕がしていたことを思い出します』とだれかに言うとき、気まずい雰囲気になって会話が途切れてしまうときがあります。でも私は妻のことを話したいのです。ただとりとめもなく妻について話したいと思うことがあるのです。確かにつらいことですが、寂しい孤独感にさいなまれるよりはましです。どうか妻を思い出して泣かせ

てください。」（ケビン・フィッツウォーター『悲しむ者と共に悲しむ』「エンサイン」1992年6月号、p.57）

●だれかが心からあなたの話を聞いてくれたときのことを考えてください。どのような気持ちになりましたか。その人に対してどのように感じますか。

思いやりは行ないを伴う

思いやりで満ちた気持ちで相手の話を聞くことによって、必要な行動がとれるようになることがあります。ソルトレークシティで扶助協会会長を務めるローイス・ポーター姉妹は入院中の年輩の婦人を見舞いました。「何かできることはないですか、と尋ねても彼女は『いいえ、何もありません』と答えるだけでした。でも、何か心配事

はないですかと尋ねると、家の芝生と猫のことが気になっていると答えました。そう言ってくれなければ私は気づかなかっただけでしょう。早速彼女に代わって芝生の水まきと猫の世話をすることができました。」

私たちは相手が何を必要としているかを知り、それに応じて行動しなくてはなりません。使徒ヤコブはこのように述べています。「ある兄弟または姉妹が裸でいて、その日の食物にもこと欠いている場合、

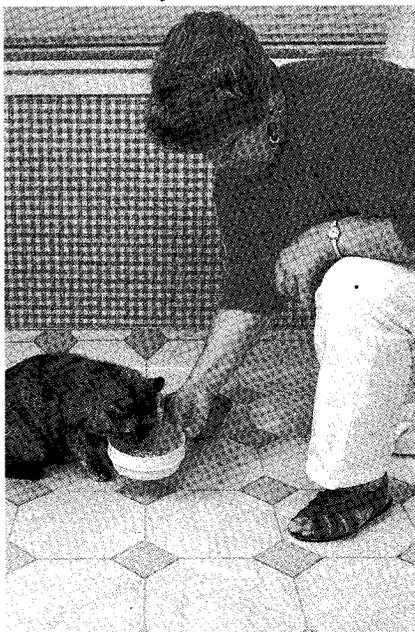
あなたがたのうち、だれかが、『安らかに行きなさい。暖まって、食べ飽きなさい』と言うだけで、そのからだに必要なものを何ひとつ与えなかったとしたら、なんの役に立つか。」（ヤコブの手紙2：15-16）

ベネズエラのカラカスに住むある姉妹たちは、奉仕プロジェクトの一環として養護老人ホームを訪問し、思いやりで満ちた行ないをしました。ホームの婦人たちのためにクッキーと飲み物を持って行ったのですが、婦人たちを見ると、皆、髪はぼさぼさで、きちんとした身なりをせず、無表情な顔で、いすにぐったりと座っていました。婦人たちの気持ちを感じ取った姉妹たちは、即座に行動しました。服を集めて、婦人たちに着せ、顔や体をきれいにして、髪を整えました。こうして婦人たちが気品を取り戻した後、この女性たちは互いに握手して話し始め、一緒にお菓子を食べたのでした。

●きょう、あなたが思いやりを込めて話を聞くと喜ぶ人が周りにいないでしょうか。

●きょう、あなたが思いやりで満ちた行ないをすると喜ぶ人が身近にいないでしょうか。□

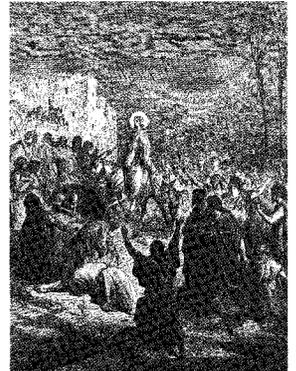
PHOTOGRAPH BY PHIL SHURTLIFF



キリスト

地上で教え導かれた最後の週

ギュスターブ・ドレの木版画



祭にきていた大ぜいの群衆は、イエスがエルサレムにこられると聞いて、しゅろの枝を手にとり、迎えに出て行った。そして叫んだ、「ホサナ、主の御名によってきたる者に祝福あれ、イスラエルの王に。」(ヨハネ12:12-13)

それから宮にはいり、商人たちを追い出しはじめて、彼らに言われた、『わが家は祈の家であるべきだ』と書いてあるのに、あなたがたはそれを盗賊の巣にしてしまった。(ルカ19:45-46)

「聖徒の道」1992年12月号には、フランスの芸術家、ギュスターブ・ドレ(1832—1883年)の木版画に描かれたイエス・キリストの降誕とみ業にまつわる出来事が掲載されました。今月号では、復活祭にちなんでイエス・キリストが地上で教え導かれた最後の週について考えてみたいと思います。

回復された福音を通して私たちは、救い主が経験された苦しみと死についてさらに深く理解することができます。キリストがお生まれになる前に、アルマはこのように予言しました。救い主は、「世の中へ出て苦難とあらゆる誘惑である試みとを受けたもう。……

この御方はその民を縛る死の縄目を解くために甘んじて死を受けたまい、また肉体をもつ者として慈悲の心に富みたまひ、虚弱の度に依りてその民を救う方法を知るために民と同じく虚弱を受けたもう。」(アルマ7:11-12)

救い主ご自身、後にニーファイ人に贖罪は主の福音の核心であると教えられました。「見よ、われはすでにわが福音を汝らに授けたるが、その福音を言い換うれば次のごとし。まずわが父われをつかわしたまいたれば、われは父のみこころを行わんとてこの世に来れり。

わが父のわれをつかわしたまいしは、われが十字架にかけられて、後にあらゆる人々をわれに引きよせんがためなり。また……御父〔は〕世の中の人を……各々の行いの善悪に応じて裁判するためにわが前に立たせたもう。」(III ニーファイ27:13-14)

「創世の前より殺さる子羊」(モーセ7:47参照)であったイエス・キリストは、ご自分の使命を十分に理解しておられました。前世で天父が「われ誰を遣わさんか」と聞かれたとき、「人の子」は答えました。「われを遣わしたまえ。」(アブラハム3:27)



PHOTOGRAPH BY PHIL SHURTLEFF; POSED BY MODELS

私がまだ自分の罪を忘れられないのは、私が完全に悔い改めていなくて、主もまだ私のことを赦してくださっていないからではないでしょうか。これ以上私に何ができるでしょう。主から赦していただける日はいつか来るのでしょうか。」

私は彼女にいくつか質問してみて、その言葉や態度から、彼女が十分に悔い改め、偽りのない従順な生活をしていることが確信できました。そこで、私は彼女に聖典を開いてくださいと言いました。そして、互いに赦し合うように、またあらゆる人を赦すようにと言われた主の戒めを、一緒に読みました。そして、私たちが互いに赦し合わなければならないとしたら、私たちは自分自身をも赦さなければならないのです、と伝えました。

彼女は人を赦す原則については受け入れていましたが、自分自身を赦すという考え方は、どうしても納得し難いようでした。ほかにもいろいろと聖句を紹介したのですが、反応に大きな変化はありません。心に安らぎを感じられないでしょう。

次に私たちは、イエス・キリストを信ずる信仰の原則について書かれた聖句を読み始めました。私は心の中で、主が私たちの会話を導いてくださるよう祈っていました。しかし、あんなにもすぐにみたまが大きな力で私たちに教えてくださるとは、夢にも思いませんでした。私は導かれるままにモルモン経を取り出し、アルマ書第36章を開きました。この章は、自分自身の聖典研究の一環として、その時たまたま読

んでいたところでした。

私は彼女に、息子アルマがその息子のヒラマンに伝えた言葉を、声に出して読んでくださいと言いました。「しかし私がこのように責め苦しめられ、すでに犯した多くの罪を思い起して非常に良心に責められていたとき、神の子であるイエス・キリストと言うお方が、世の人の罪を贖うためにこの世へ来りたもうと言うことを、私の父が前に人民に予言をしたことを思い出した。」(17節)まるで彼女に直接語りかけているような聖句でした。興味深いことに、アルマは自分の犯した罪を思い起こしたときに、主の贖いについても思い起こしています。

彼女はさらに読み続けました。「そしてこれを思い出したとき、私は心の中で『神の御子イエスよ、永遠の死の鎖にしばられて今苦汁くじゅうを飲まされている私を憐れあわれみたまえ』と歎願たんがんをした。」(18節)この姉妹の心の叫びは、アルマの叫びと同じものでした。

そして19節を読み始めました。「このように心の中で願うと、ごらん、私はもう少しも〔罪〕を覚えず……。」

私は思わずその聖句を見直しました。彼女が読み間違えたからです。「罪」とは書いていなかったのです。

私は彼女にその節をもう一度読んでほしいと言いました。そして、彼女に苦しみをもたらした疑問に対する答えが間もなく与えられることを、みたまのささやきを通して知りました。

そのページから目を離すことなく、彼女は声を出さずにその聖句を読み直しました。すると、見る見るうちに彼

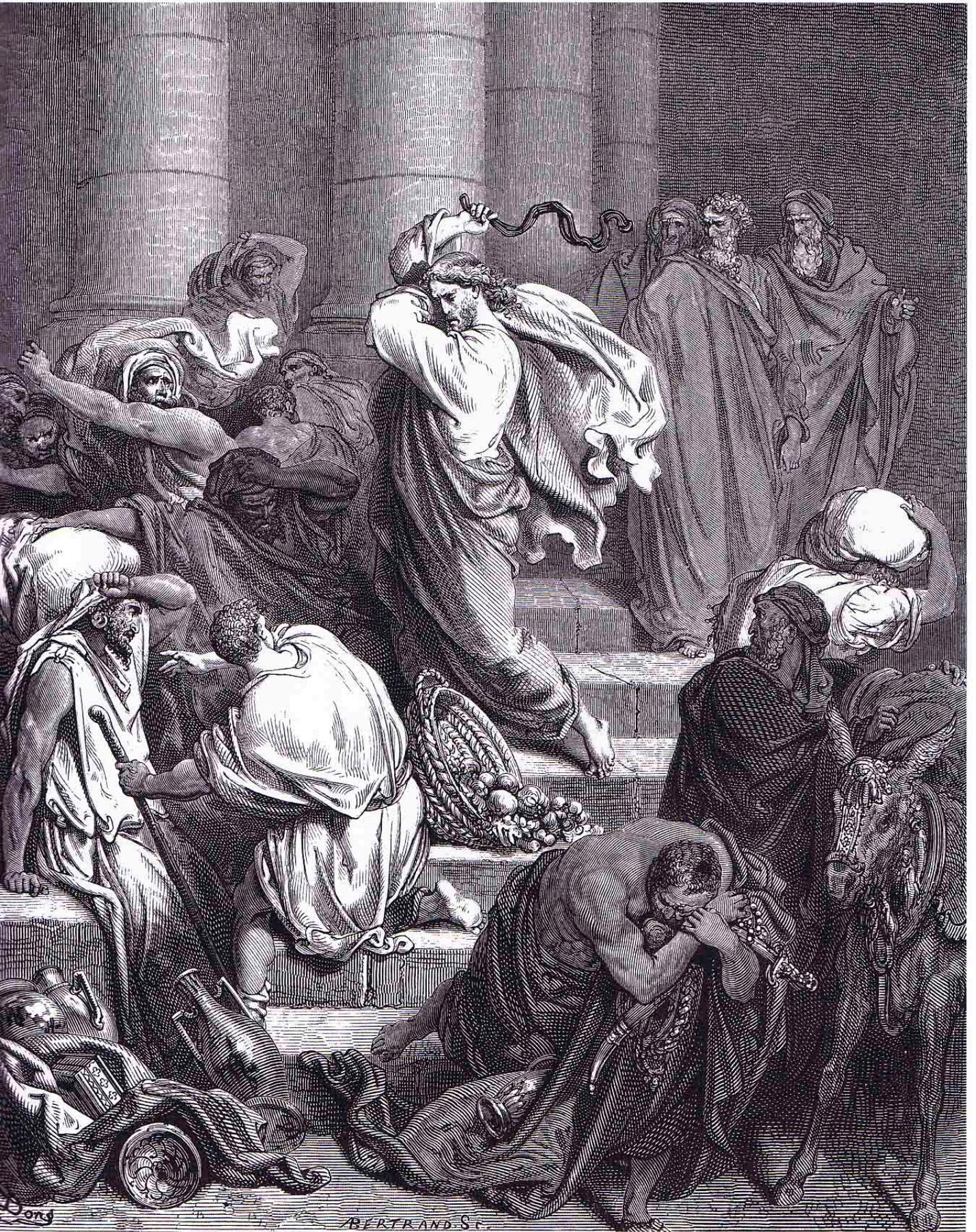
女の目が涙でいっぱいになりました。何かが理解できたのでしょうか。やがて涙でむせびながらも、再び声を出して読みだしました。「このように心の中で願うと、ごらん、私はもう少しも苦痛を覚えず、再び自分の罪を思い出して苦しむこともなかった。」(下線付加)

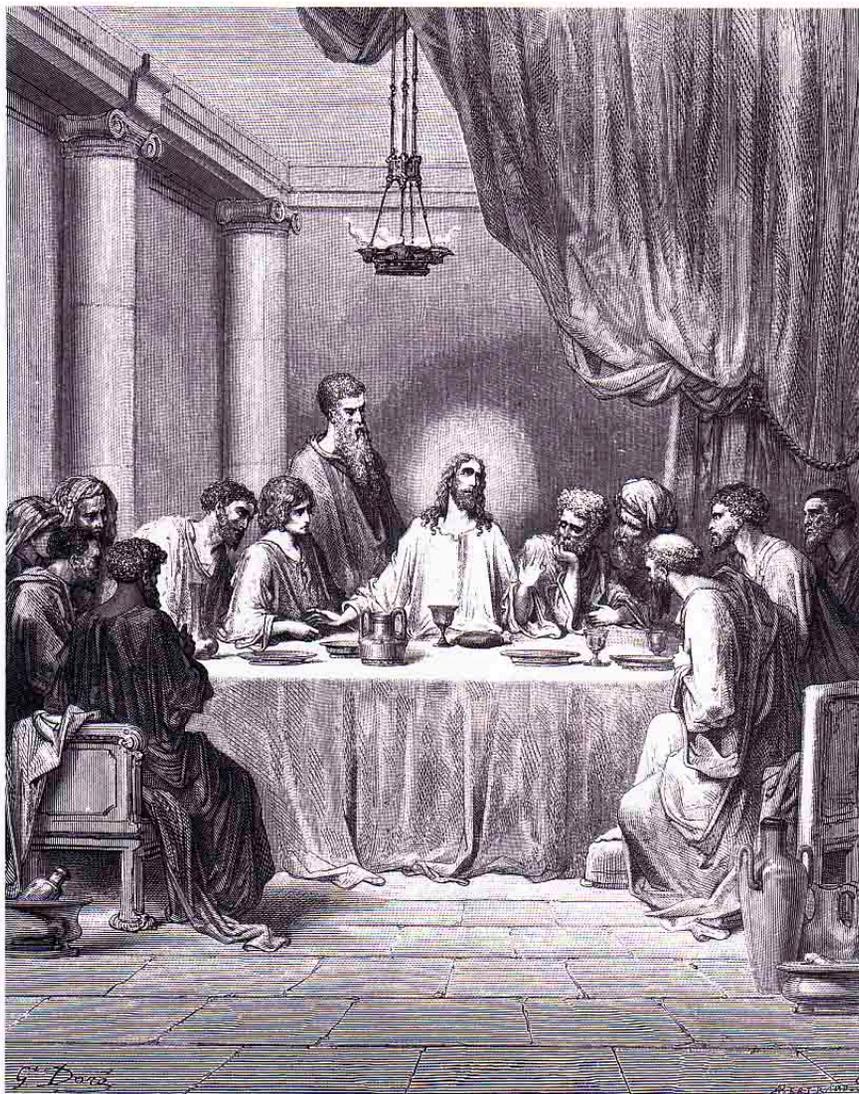
目からあふれる涙は、もう苦しみの涙ではありませんでした。理解し納得できた喜びの涙でした。

この感動的な経験をした日以来、私はたびたび同じような喜ばしい場面を目にする機会にあずかってきました。つまり、人々が主の祝福を受けてこの原則を理解できるようになる瞬間を目にしてきたのです。

このような経験を通じ、またアルマ書第36章の教えを通して、私は、人が真心から悔い改め、主とその贖いを信ずる信仰を働かせるならば、必ず赦されるということを確信するようになりました。かつて犯した罪については、折に触れて思い起こすことがあるかもしれませんが。しかしもし私たちが、贖いが実在することを忘れずにいるならば、もう少しも苦痛を覚えなくなるでしょう。自分の罪を思い出して「苦しむ」ことがなくなるのです。

そうなれば、私たちもアルマと同じ思いになることができます。アルマはこう言っています。「ああ、この時私の感じた喜びと、私が見た驚くべき光とはいかにも大きかった。まことに、私はこの時、前に感じた苦痛にひとしいほどの喜びに満ちたのである。」(アルマ36:20)□

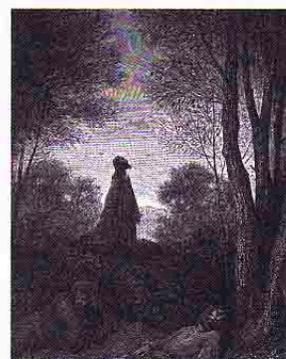


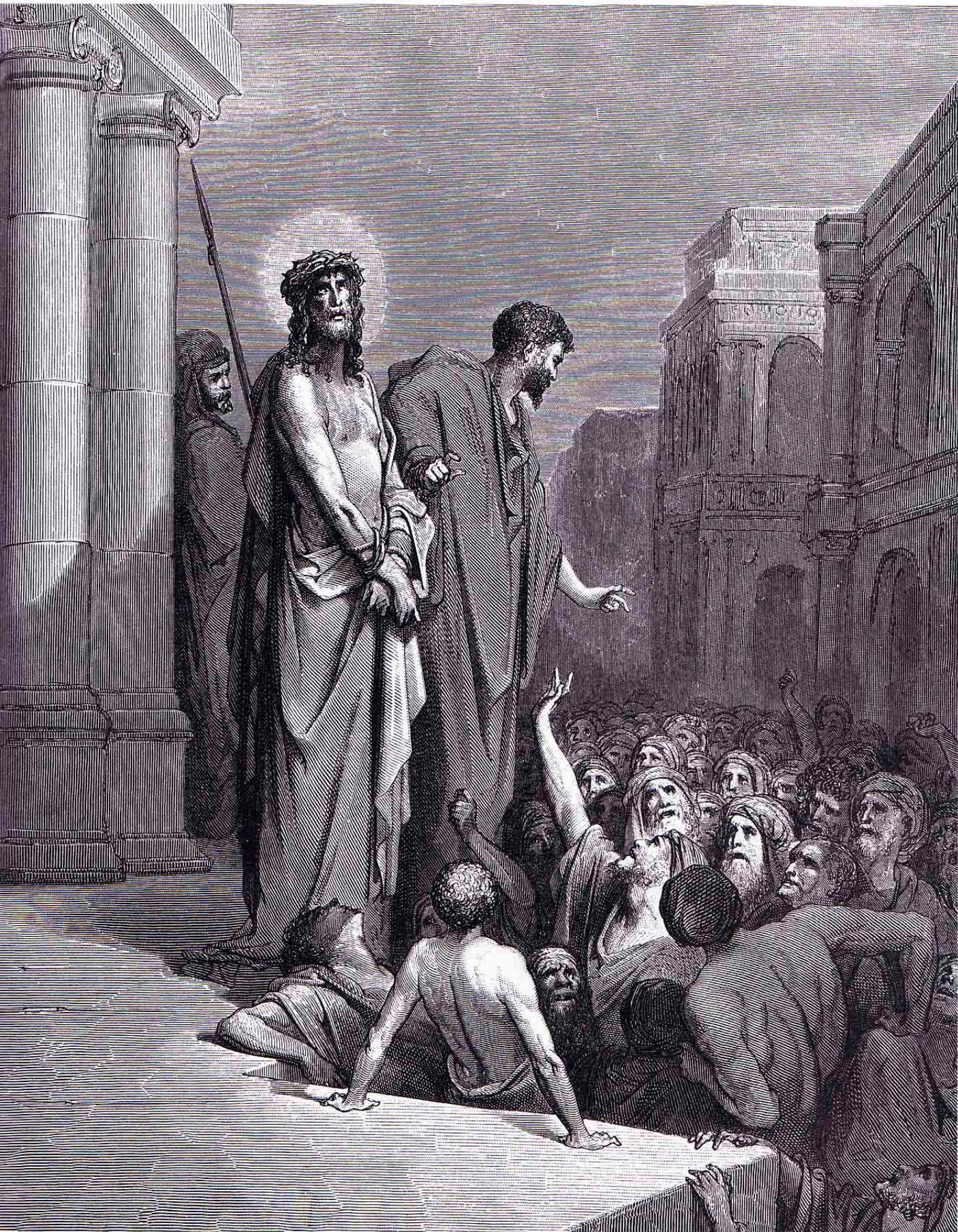


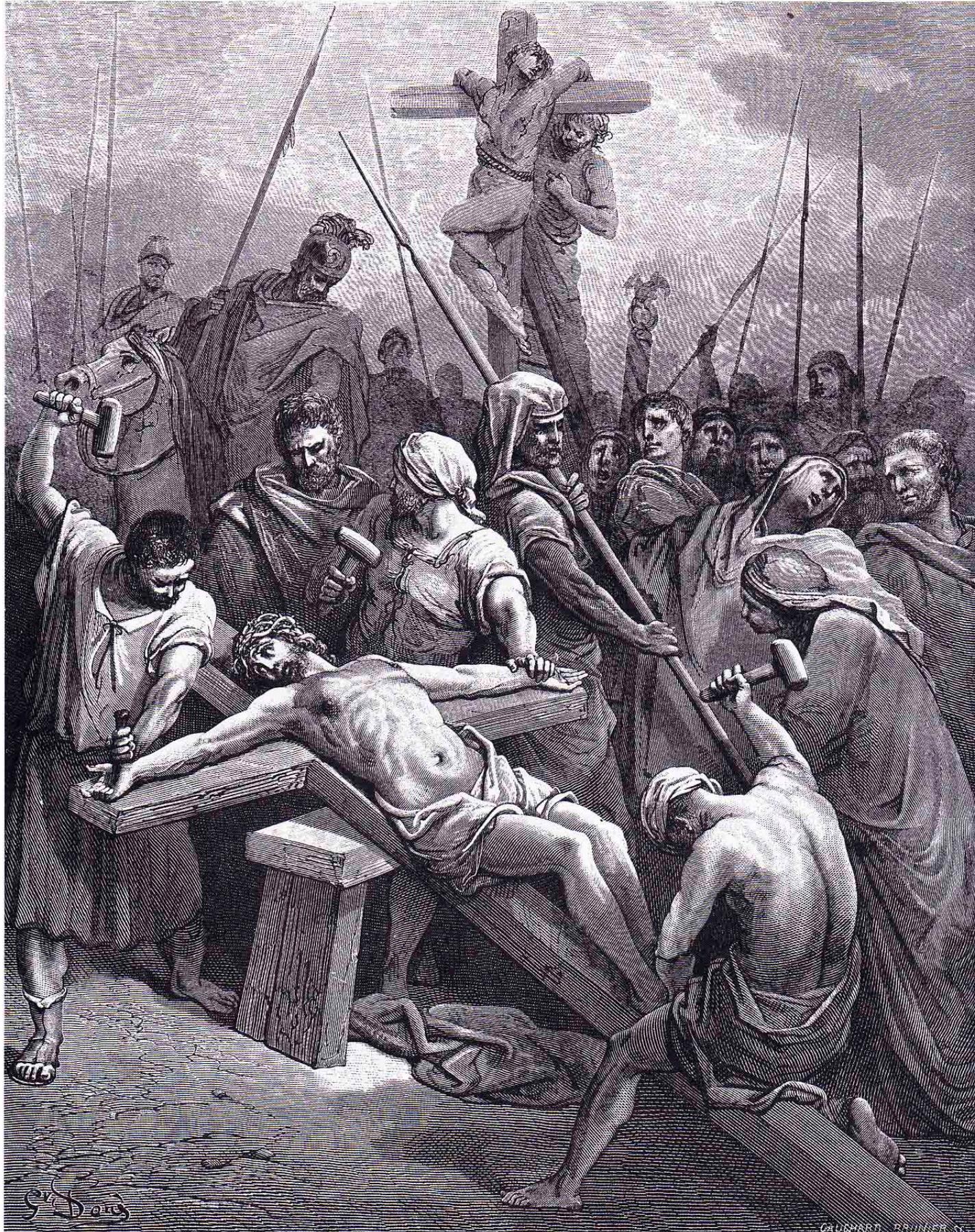
一同が食事をしているとき、イエスはパンを取り、祝福してこれをさき、弟子たちに与えて言われた、「取って食べよ、これはわたしのからだである。」また杯を取り、感謝して彼らに与えて言われた、「みな、この杯から飲め。これは、罪のゆるしを得させるようにと、多くの人のために流すわたしの契約の血である。」(マタイ26:26-28)

そして少し進んで行き、うつぶしになり、祈って言われた、「わが父よ、もしできることでしたらどうか、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。しかし、わたしの思いのままにはなく、みこころのままになさって下さい。」それから、弟子たちの所にきてごらんになると、彼らが眠っていた……。 (マタイ26:39-40)

ピラトはユダヤ人らに言った、「見よ、これがあなたがたの王だ。」すると彼らは叫んだ、「殺せ、殺せ、彼を十字架につけよ。」ピラトは彼らに言った、「あなたがたの王を、わたしが十字架につけるのか。」祭司長たちは答えた、「わたしたちには、カイザル以外に王はありません。」(ヨハネ19:14-15)

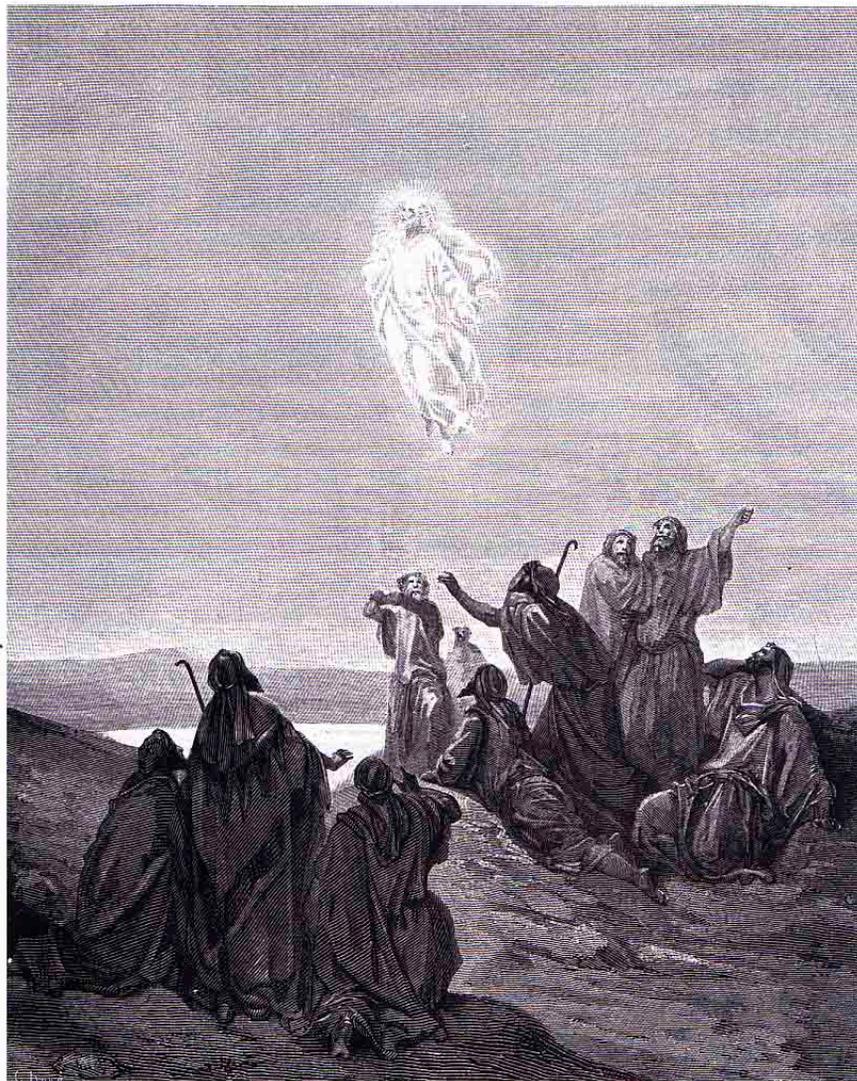
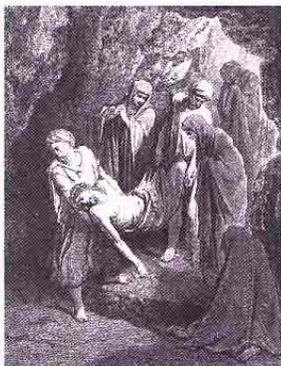






されこうべと呼ばれている所に着くと、人々はそこでイエスを十字架につけ、犯罪人たちも、ひとりには右に、ひとりには左に、十字架につけた。(ルカ 23:33)

彼らは、イエスの死体を取りおろし、……香料を入れてあまねの亜麻布で巻いた。イエスが十字架にかけられた所には、一つの園があり、そこにはまだだれも葬られたことのない新しい墓があった。……イエスをそこに納めた。(ヨハネ19:40-42)



〔イエスは〕彼らに言われた、「……聖霊があなたがたにくだる時、あなたがたは力を受けて、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、さらに地のはてまで、わたしの証人となるであろう。」こう言い終ると、イエスは彼らの見ている前で天に上げられ、雲に迎えられて、その姿が見えなくなった。(使徒1:7-9)□

エクアドル



ドン・L・サール

エクアドルの聖徒は、「地球の真ん中」には 信仰のしんがあると教えてくれます。

エクアドルのキトかグアヤキルの新聞を開いてみましょう。きっと、エクアドル経済を活性化するために、未開発資源を開発する提案や事業に関する記事が目に入るでしょう。エクアドルは未開発の天然資源の宝庫なのです。

しかし、それにも増して豊富なのが霊的資源です。エクアドルの自然の富の開発がいまだに苦勞のさなかにある一方、霊的資源は福音が広まるに従って静かにその花を咲かせているのです。

この霊的資源は国じゅうの末日聖徒一人一人の生活に見受けられます。

●キトにあるホセ・トルヒーリョ兄弟の家に入ると、普通の家庭なら居間に相当するほどの広い客間があります。トルヒーリョ兄弟は、この部屋を教会のみ業のための仕事部屋として使っています。キト・コロンスターキ部の祝福師として、この部屋で祝福師の祝福を授けているのです。

トルヒーリョ家族は、宣教師が初めてエクアドルに来た翌年の1966年にバプテスマを受けました。トルヒーリョ兄弟はこう述べています。「この国で末日聖徒であることは必ずしも容易ではありません。しかし、どんな試練も福音の喜びに比べれば取るに足りないことです。」

トルヒーリョ兄弟姉妹は福音を全面的に生活に取り入れるように家族に教えてきました。10人の子供のうち5人が専任宣教師として伝道し、現在は孫たちが伝道に出始めています。

エクアドルでの教会の発展は回復された福音にとってまだほんの始まりにすぎないと、トルヒーリョ兄弟は確信しています。「予言が成就されなければならぬからです。予言には、福音は全世界に充ち満つるとあるでしょう。」(教義と聖約65：2参照)

●オタバロの町外れの舗装されていない道から小さなトゥモロコシ畑を抜けると、2部屋きりの小さな家に着きます。ここには、オタバロステーキ部の第二副ステーキ部長ファン・ホセ・ムーニョス兄弟が、奥さんのラウラ姉妹と4人の子供たちとともに住んでいます。ムーニョス姉妹はワード部の扶助協会の会長を務めています。

上——エクアドル、オタバロの伝統的なタペストリーの模様。右——ラウロ・ヤムエルラ兄弟と家族。後ろは食品販売の仕事でヤムエルラ兄弟が使っているトラック。



左——セサル・ウーゴ・カクアング
(11歳)とふたりの弟のファン・パブロ
(9歳)とリカルド・アントニオ(7歳)。
右——パオラ・ヤネス姉妹。下——キ
トの教会配送センター課長のヘンリ
ー・オルティス兄弟。

1986年にムーニョス家族はペルーの
リマ神殿で結び固めを受けました。
「主の助けなしには不可能でした」と
ムーニョス副ステーク部長は言います。
彼らは神殿へ行くための費用として1
年以上もの間、収入の半分の額を蓄え
てきました。そして、少ない持ち物を
売り、それでも足りない分を補うため
に20ドルの借金もしました。1988年
には同じような努力の末、もう一度神
殿に行くことができました。

福音の祝福を完全に理解するには、
末日聖徒は神殿に行かなければなら
ないと、ムーニョス副ステーク部長は
言います。「だからこそ私たちは、エ
クアドルに神殿が建つ日を心待ちに
しているのです。」

●グアヤキルのラウラ・グレーロ姉
妹に「お座りください」と言われたら、
ラウラのセミナーのテキストの上に
座ってしまわないように気をつけて
ください。壊れたテーブルを修理して
もらえないので、ずっといすをテー
ブル代わりに使っているのです。

数脚の木のいすを除けば、この日干
しれんが造りの家の居間には家具らし
い家具はありません。グレーロ姉妹は、
この家に6人の子供と住んでいます。
(もうひとりの19歳になる息子は、伝
道資金をためるためにボリビアに働き

に出ています)グアヤキルのこの地域
には、上水道も下水道ありません。
寝室はカーテンで仕切られているだけ
です。それでも、広い居間はグレーロ
姉妹のセミナーのクラスに十分な広
さです。

グレーロ姉妹は役所で仕事をして生
計を立てていますが、将来もっと良い
収入を得て生活を向上させることが
できるように、法律の勉強をしています。
また、グアヤキル南ステーク部扶助協
会の第二副会長としても働いています。
そんな忙しい生活にあっても、喜んで
セミナーの教師を務め、朝はもちろん
のこと、朝来られない生徒のために
夜にもクラスを教えているのです。
「私が一番幸せを感じるのは、若い人
たちの力になってあげられるときで
す」と姉妹は言います。

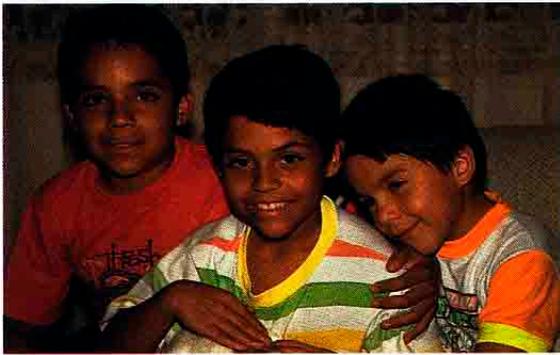
霊的資源の開発

回復された福音が初めてエクアドル
にもたらされたのは、1965年のこと
でした。その年の10月9日、当時十二使
徒定員会会員であったスペンサー・
W・キンボール長老がキトの丘に立っ
てその地を奉獻し、民が「その生活
を変え」、主が立てられた「偉大なプ
ログラムを推し進めるために固く結ばれ

るように」と祈ったのでした。さらに
キンボール長老は、エクアドルの先住
民のインディアンを特に祝福してく
ださるよう主に請い求め、「彼らが長
い間待ち望んだ福音の栄光あふれる真
理に満たされるように」とも祈りまし
た。(「アンデス伝道部歴史」1965年10
月9日)

教会の成長は始めはゆっくりでした。
しかし、霊的資源が海岸地帯やエクア
ドルのオタバロインディアンの住む地
区などの広い地域で採掘されるにつれ、
成長の速度は次第に増していきました。
現在、教会員たちは繰り返しこう言
います。「福音のおかげで人生が変わ
りました。」まるでキンボール長老の祈
りの言葉そのままです。

今では、エクアドルは3つの伝道部
(グアヤキル北、グアヤキル南、キト)
と11のステーク部に9万人の聖徒を抱
え、神殿の建設も予定されています。
会員数は年9パーセントの割合で成長
を続け、人数にして毎月数百人からと
ときには千人以上もの人々が改宗して
います。会員の中には、経済的な理由
で教会に集い続けるのがむずかしい
状況にある人もいます。自動車や電
話を持っていない会員が多く、家
族で教会に通うのに経済的負担が
大きすぎるのです。それに加えて、
職に就いたり、今



までの職を続けるために一時的に転出する人や、平日はもとより週末にも残業を余儀なくされる人が多いのです。それでも、エクアドルの聖徒たちはほかの地域の会員同様、忠実に教会に集っています。

福音とその祝福はどこでも同じですが、生活に関していえばキトやオタバロ、グアヤキルでは、会員たちの生活はそれぞれに随分と異なっています。

キト

キトの古くからの町並みにはスペイン統治時代の名残があり、植民地時代の雰囲気漂っています。しかし、数キロ先には銀行やファッショナブルな店が建ち並び、高層のオフィスビルがそびえて、キトの近代的な都会の顔をのぞかせています。エクアドルの地名の由来となったエクエーター(赤道)からわずか数キロ南に位置しながらも、キトの気候はいたって穏やかです。キトの高速道路には「地球の真ん中」行きという道路標識が立っています。

キトをはじめ、キトの町があるアンデス山脈のシエラと呼ばれる高地一帯は、その伝統の豊かさで知られています。エクアドルの歴史をたどると、たいていこの地に行き着くのです。また、



ここに住む教会員の中には、エクアドルにおける教会の発展の歴史をその始まりから見守ってきた人たちがいます。「現在の教会の成長ぶりから、私たちは将来により一層の成長を期待しています」と語るのは、1968年にバプテスマを受けたセサル・カクアング兄弟です。彼は今まで日曜学校教師から始まって、伝道部長に至るまでさまざまな召しを果たしてきました。現在はグアキル地区の地区代表であり、キトに住み、同じキトにある南アメリカ北地域管理本部で部長として働いています。

教会の成長とともに克服すべき問題も発生しました。そのひとつは、教育がないために自分に自信がなく、指導者として働くことなど考えたこともない会員たちに、指導力と奉仕の精神を培うことです。自分より高い教育を受けた人たちや裕福な人たちを訪問するように召されたホームティーチャーや家庭訪問教師の中には、自分には何も与えるものがないと感じて訪問しようとしぬ人もいます。

カクアング兄弟はほかの指導者同様、この問題は教会員が福音を全面的に生活に取り入れることで克服できると言っています。「人が教会に改宗すると、霊的な部分だけでなく、目に見える部



左—— オタバロ・ラティーン支部のミリアム・ガルシア姉妹と自宅裏のストッキング織り機。この収入は弟の伝道資金にも使われている。右—— インバブレード部のフランシスコ・カスタニエダ監督。下—— オタバロステーク部のホセ・カスタニエダ兄弟と奥さんのマリア姉妹は、教会がふたりの生活を完全に変えたと言っている。

分にも影響が現われるものなのです。」人々は改宗すると悪い習慣を改め、自分自身を清く保つとともに、家を清潔にしておくようになります。そして、福音を学ぶことで教育への関心と学習能力が増し、喜んで奉仕することによって指導者として成長し、家族と教会と地域社会に対してさらに効果的な手助けができるようになるのです。

キトの教会員たちを目にすれば、今彼らの中に、ある種の活気がみなぎっているのを感じずにはいられないでしょう。また彼らの信仰の強さもよく伝わってくるはずです。多くの会員の信条は、教会の地域管理本部の机にある標語に象徴されています。「それは救い主の方法でしょうか。」

マルコ・カニャール兄弟と奥さんのピエダ姉妹の家族の献身は、そんな多くの家族の典型と言えます。カニャール兄弟はキト・サンタアナステーク部の祝福師として奉仕し、カニャール姉妹はステーク部扶助協会会長に召されています。長男のルイスと娘のルスは伝道を終え、その弟ブラジミール、ハビエル、ダビッドとマイクルも伝道に出る日を楽しみにしています。年下の息子たちは、学校の友達も彼らがモルモンであることを知っていて、信仰を守ることに理解を示してくれる、と

言います。

彼らは霊的ではあっても、必ずしも堅苦しい生活をしているわけではありません。家庭の夕べのゲームでは、ブラジミールが水の入った小さなコップを持ってマイクルの前に立ちます。マイクルが時間内に質問に答えられなければ、顔に水をかけられるのです。このゲームでは、たとえ両親でもこの罰から逃れられません。

グレース・トーレス姉妹もまた、その人生が福音への献身によって形成されてきたひとりです。彼女は帰還宣教師で、化粧品会社のコンサルタントとして働いていますが、将来は手工芸品の輸出業をしたいと考えています。音楽やダンス、いろいろなスポーツなどの独身成人の活動にも熱中しています。このような活動は個人を強める目的で行なわれているものですが、活動を通じて結婚に至った人々もおおぜいいます。これは、教会の活動に参加する若い会員たちにとって、末日聖徒の結婚相手を見つけることが困難な時代はもう終わったことを意味する、とトーレス姉妹は説明しています。

彼女によると、福音の教えを生活の中に取り入れられないために教会から遠ざかる人たちも中にはいますが、ほとんどのキトの独身成人たちは互によく

助け合い、支持し合っているそうです。トーレス姉妹は、独身成人以外の人々についても言及し、次のように述べています。「ほかの地域と同様に、キトでも『道端に落ちた種』（マタイ13：4参照）のような信仰しか持てない会員もいれば、あふれるばかりの福音の祝福をみずから拒んでしまう会員もいます。しかし福音が伝えられて30年にも満たないこの地域にも、今では献身的な末日聖徒を支える信仰と助け合いの精神という大きな基盤が築かれています。」

オタバロ

オタバロは赤道のすぐ北にあり、キトとは異なる半球に位置していますが、文化的にもまったく異なっています。

ここでは、オタバレーニョスと呼ばれるオタバロインディアン文化が大勢を占めています。そして、オタバレーニョスの伝統的な織物製品の中心地でもあります。色鮮やかなセーターやボンチョ、ハンドバッグに使われる織物には、手のかかる手織りに代わって工業用ミシンや輸入した動力織機が導入されています。オタバレーニョスにはビジネスの才にたけた人が多く、エクアドル全土や他国にまで商品の販路を

左 — プカラ支部長のルイス・アルベルト・カクアング兄弟とその家族。プカラの自宅前。右 — オタバロステーク部のステーク部大会の開会を待つ会員。下 — 執事定員会アドバイザーのアレックス・バレンスエラ兄弟とプラテラワード部の会員たち。

延ばしています。

オタバレーニョスの教会員たちは、自らをレーマン人と考え、ヨーロッパ系とインディアンの混血の教会員を「ラティーノス」と呼んでいます。エクアドルのオタバロ以外の地域では、この混血の人々が大多数を占めているので「ラティーノス」という言葉を聞くことはめったにありません。しかしオタバロでは、だれもこの区別に抵抗を感じてはいないようです。オタバロステーク部では約25パーセントがラティーノスですが、そのほとんどの人がオタバレーニョスの言語であるキチュア語を話せないため、ステーク部にラティーノス支部と呼ばれるスペイン語のユニットが設けられています。一方、ステーク部のほかのユニットに属するオタバレーニョスの会員のうち、25から30パーセントはスペイン語が話せません。

ステーク部大会では、レーマン人の会員とラティーノスの会員は兄弟姉妹として互いに和やかにあいさつを交わします。ステーク部長のホセ・アルベルト・ピクアシー兄弟がまず大会の冒頭にこうスペイン語で話し始めます。「皆さんを、すべての皆さんを愛していると申しあげます。」大会が進むにつれて、聖句を引用したり証を述べたりするときにわずかにスペイン語を交

える人がいる以外は、大半の話はキチュア語で話します。

土曜日の午後の指導者会では、ムーニョス第二副ステーク部長が指導者たちに総大会のビデオを15分間ほど見せていました。スペイン語の翻訳がわからない人たちもいるでしょうが、「少なくとも総大会にいるようなみたまを感じるができますから」と彼は言います。

オタバロの多くの会員たちにとって、みたまの力を感じるこそ福音そのものなのです。ラウロ・ヤムエルラ兄弟と奥さんのルシラ姉妹もそう感じています。ヤムエルラ兄弟によると、最初は宣教師たちに随分面倒をかけたということでした。しかし、みたまが宣教師のメッセージが真実であると証したとき、「バプテスマを受けるからには福音の教えに厳格に従おう、と目標を立てたのです。」経営している食料品店を日曜日に休業したときには、初めは客が減るだろうと心配しましたが、実際の売り上げはかえって伸びました。

改宗以来、ヤムエルラ兄弟姉妹は奉仕に深くかかわってきました。ヤムエルラ姉妹はワード部扶助協会会長として、姉妹たちが料理やほかの基本的な家事など実用的な技術を身につけられるよう協力したいと願っています。し

かし、何よりも大切なのは姉妹たちに「キリストの愛を人に伝える器になる」よう教えることだと考えています。

ステーク部扶助協会会長のホセフィーナ・カクアング姉妹は、「家庭訪問教師が心のこもった言葉と行ないで担当の姉妹との交わりを持つことは、会員がキリストの愛を示すひとつの方法です」と語っています。とは言っても、全員を訪問するのは容易なことではありません。それというのも、会員の家の多くがオタバロ市郊外のエルカンボと呼ばれる田舎に点在していて、家庭訪問教師もホームティーチャーもたいてい徒歩で訪問しなければならないからです。

たとえば、カクアング姉妹のご主人のルイス兄弟が支部長を務めているプカラ支部は、パンアメリカン・ハイウェイ沿いに北に数キロ伸び、東は5、6キロほど山のふもと丘陵地帯に入り込んでいますが、会員のほとんどは歩いて教会に通っているのです。教会が提供した資材で建てた小さく簡素な教会堂は、末日聖徒だけでなく地域住民の誇りともなっています。

ルイス・カクアング兄弟はある意味ではプカラ全体の支部長と言えるかもしれません。彼は、話を聞く人にはだれにでも福音を宣べ伝えています。彼



の奉仕の精神は実生活でも発揮されています。ルイスが小型トラックでオタバロの町まで出かけるときは、プカラの住民と一緒に乗せてもらえることを知っています。そして帰りには、だれかに頼まれた品物を運んでいることがよくあります。

ステーキ部の会員はさまざまな方法で奉仕をしています。中には家族に密着した奉仕の機会もあります。ミリアム・ガルシア姉妹は実際はラティーン支部に集っていますが、オタバロワード部の扶助協会の第一副会長として召されています。自宅の裏の作業場には数台の動力織機があって、エクアドルやペルー、コロンビアで売るストッキングを織りあげています。収益の一部は、グアヤキルで伝道している弟の伝道資金になっています。彼は宣教師に召される前にガルシア姉妹に福音を紹介したのです。

「教会に入る前にも神を信じていましたし、キリストが再臨されることも信じていました。でも、どうやって自

分を備えたらよいかわかりませんでした」とミリアム姉妹は言います。今では福音の計画の知識と天父の霊的な支えに心から感謝しています。そして、グアヤキルの弟に送金できる経済的な祝福にも感謝しています。

グアヤキル

エクアドル最大の都市であるグアヤキルは、商業の中心地であり、この国の3大港湾都市のひとつですが、現在は、にわか景気が過ぎ去った不況の街といった雰囲気があります。グアヤキルはバナナの輸出とえび漁をはじめ漁業の中心地です。えび漁は近年、漁場での水揚げが激減して深刻な打撃を受けています。

グアヤキルは職を求める人たちを磁石のように引き付け、増加する一方の人口の流入に市の行政サービスが追いつけない状態にあります。地域によっては上下水道の設備がなく、昼夜を問わずポンプで川の水をタンクにくみ上

げ、トラックで遠く離れた住宅地まで運んでいる所もあります。

金物屋を経営し、グアヤキル南ステーク部長を務めるホセ・ガブリエル・アルバレス兄弟は、教会員も含めて市の住民の70パーセントは行政で言う「貧困」以下の生活レベルだと言います。商業も概して衰退傾向にあります。失業と貧困は犯罪の多発にもつながっています。

このような問題にもかかわらず、エクアドルの沿岸地帯の人々の親しみやすく開放的な性格が町全体のムードになっていて、ほとんどの人が将来については楽観的なようです。

エクアドルの教会の成長が最も目覚ましいのはこのグアヤキルです。グアヤキルの人々に新しい考えを受け入れる姿勢があるからです。市の全人口200万人のうち、1万6,000人は末日聖徒です。グアヤキルには18の教会堂があり、今後も新しい教会堂の建築が予定されています。

この急激な成長に教会はどう対処しているのでしょうか。グアヤキル北ステーク部のジミー・オルベラ第二副ステーク部長は、ほほえみながらこう答えます。「必要なのはもっと多くの指導者を養成することです。それに宣教師ももっとたくさんほしいですね。」

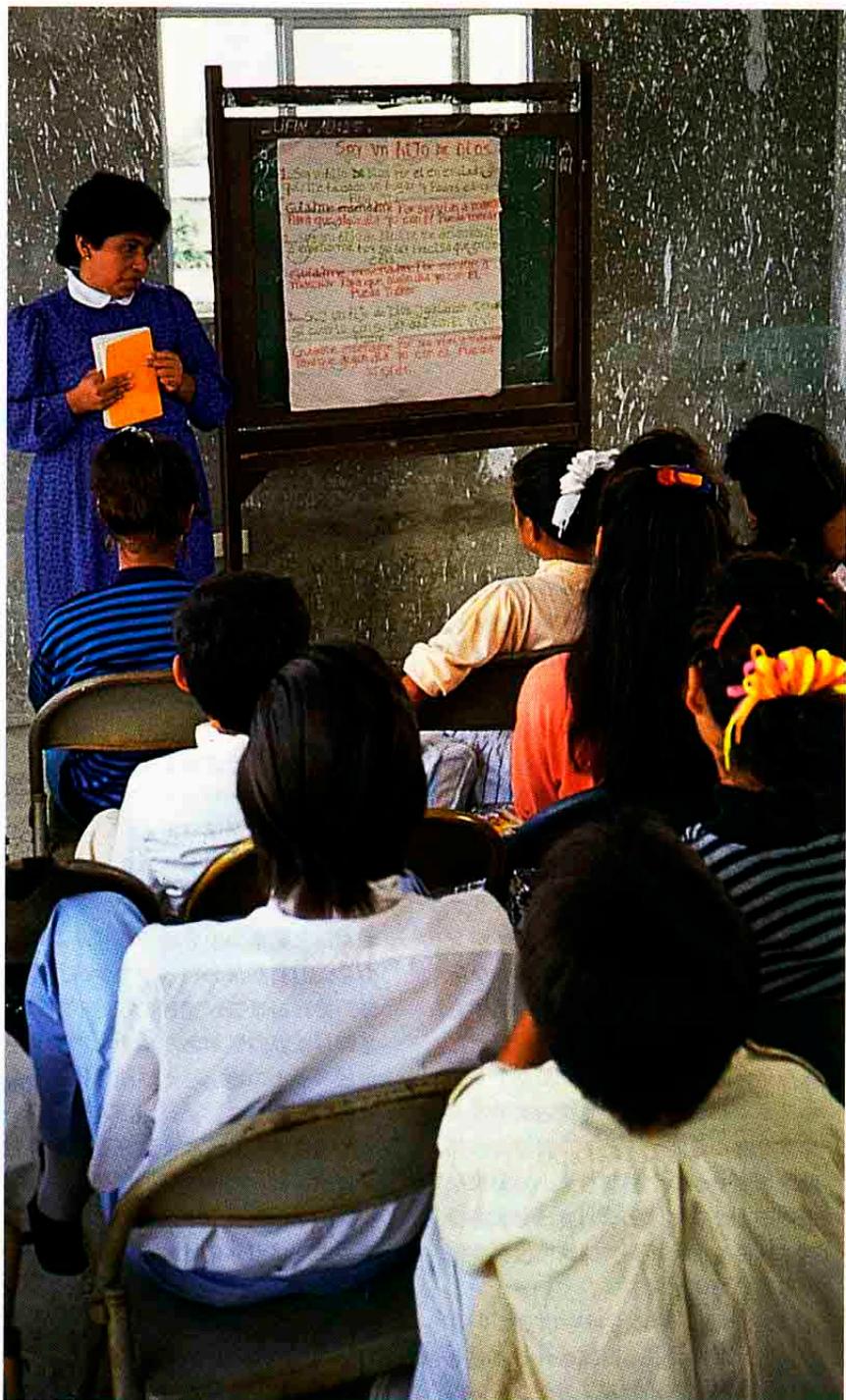


もちろん、教会がエクアドルに創設されて以来教会の基を築いてきた古い会員たちもいます。アダルベルト・トーレス兄弟は1969年のある夜、夢で聖書とその傍らに見たことのない本を見て、それが真理を受け入れる備えとなりました。4カ月後、友人が末日聖徒のふたりの宣教師から福音を学ぶのに同席しているとき、あの見たことのない本が何かを知ったのです。モルモン経の最初の一節を読んだだけで、それが真実であると確信できました。

やがてアダルベルト兄弟がバプテスマを受けてから、彼の奥さんはそれが賢明なことだったかどうか懸念しました。しかし、彼女の場合も夢が確信を与えました。夢の中で、珍しく聖書を読む自分の姿を目にしたとき、夫が選んだと同じ真理の道を自分も歩むことになるかと悟ったのです。

グアヤキル西ステーク部の祝福師であるトーレス兄弟は、会員たちの多くは「無意識のうちに教会について証している」と言います。つまり、毎日の生活を通してという意味です。人々は末日聖徒の生活を見て、その幸せそうな雰囲気と活力の源が何か知りたがるのです。

トーレス夫妻は、12人の子供たちにとって福音が生活に欠かせないものと



左——カルロス・フリヤス兄弟とフランシスカ姉妹。夫妻は共に帰還宣教師で、カルロスはグアヤキル中央ステキ部サード第1ワード部の監督を務めている。右——グアヤキルの日曜学校独身成人クラス。下——教会堂として使われている借家の一室で日曜学校のクラスを教えるグアヤキルのラウラ・ゲレーロ姉妹。ゲレーロ姉妹はセミナーの教師もしている。

なるように一人一人を育ててきました。ヘンリー・トーレス兄弟は最近コロンビアでの伝道から帰還しました。伝道はむずかしかったでしょうか。そんなことは考えてもみなかったと言います。「主は決してやさしいことだとは言われませんでした。主が言われたのは、私たちには成し遂げる力があるということです。」

教会があまりに急激に成長したため、年齢的に若いヘンリー・トーレス兄弟や教会歴の短い会員たちが指導的な立場に立つようになっていきます。

地元の指導者たちはサンティアゴ・レオン兄弟と奥さんのラケル・ブルアス・デ・レオン姉妹のようなカップルの神殿結婚がよい模範となって、より多くの若い人がその後が続いていると言っています。サンティアゴ兄弟とラケル姉妹のふたりは、ペルーのリマ神殿で結婚するという決意を揺るがすことなく、経済的な困難や、ほかの信仰を持つ互いの家族の反対などを乗り越えました。「外から神殿を眺めただけで幸せになりました」とサンティアゴ兄弟は当時を思い出して言います。「でも、中に入って儀式にあずかることこそまさに大きな祝福でした。」小さな自宅の客間には、ワシントン神殿の写真が飾られています。写真の下に

は次のような言葉を記した手書きのプレートが掛けられています。「エクアドルよ、^{なんじ}汝の神殿のために自らを備えよ。」

カルロス・フリヤス兄弟と奥さんのフランシスカ姉妹は共に帰還宣教師で、福音に根ざした愛をその生活にちりばめています。カルロス兄弟はグアヤキル中央ステキ部のサードワード部の監督として、そしてフランシスカ姉妹はワード部の若い女性の副会長として召されています。ふたりには幼い男の子が3人います。

監督夫妻が青少年に信頼されているのは、おそらくその生き方に負うところが大きいでしょう。監督はこう言います。「若い人たちに、こう生きなさいと言ったり教えたりもできますが、よい模範をみずから示さない限り、教えられたことを実行しようとはしないと気がついたのです。もし、私が過ちを犯せば、つまり彼らにしないように言ったようなことをすれば、彼らが教えてくれます。」監督はワード部のこのように誠実な会員たちの助けに心からの感謝を述べていました。

フリヤス監督夫妻は青少年の時から教会員ですが、成人してからバプテスマを受けた人にとっては、教会での奉仕が指導力養成の集中講座のような

ものになっています。

1988年に改宗したエルネスト・メルチャン兄弟は、以前は長老定員会会長を務め、現在は副監督として働いています。彼は、バプテスマの誓約を厳格に守るように努力しています。それは「主が聖典の中で、人の光となるようにと言われたからです。」(マタイ5:16参照)メルチャン兄弟は親戚の中でいつか福音の光を見つける人が出るように願っているのです。

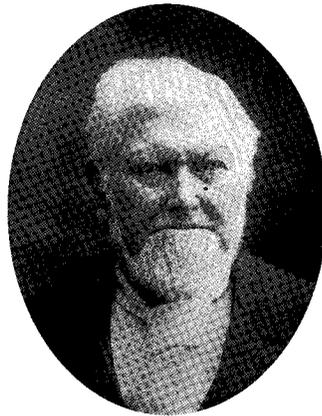
しかし、奥さんのカルメン姉妹はすでにその光を見てきました。教会でのメルチャン兄弟の成長と自分に示された教会員の愛を2年間、目の当たりにしたのです。やがて彼女は、バプテスマを受けてからわずか1年でワード部の扶助協会会長に召されました。教会での経験不足と地域の会員たちの貧困は、召しを果たすうえで、主の助けがある限りあまり問題ではない、とカルメン姉妹は言います。ほかに方法がないときでも救い主が教えられたように「愛を注ぐことはできますから」と彼女は話しています。

「ここエクアドルでもどの国でも主は同じお方です」とエルネスト・メルチャン兄弟は言います。「福音はひとつですし、私たちは皆家族なのでくら。」□

ウィルフォード・ウッドラフ

信仰と熱意の人

レオン・R・ハートション



偉大な信仰と熱意の人ウィルフォード・ウッドラフは、注意深い耳と聖霊の導きに従順な心を兼ね備えた模範として、教会員一人一人に多大な影響をもたらしました。特に彼には、主に頼れる強い指導者であることが要求されました。非常に困難な時代に主の教会を指揮しなければならなかったからです。

1887年にジョン・テイラー大管長が死去したとき、ウィルフォード・ウッドラフは身を隠していました。教会と合衆国政府の間で多妻結婚について摩擦が生じていたからです。教会の財産は連邦政府から差し押さえられ、家長である多くの神権者や指導者たちは、身を隠すか投獄されるかの選択を迫られたのです。アイダホ州の聖徒たちは、投票権さえ失いました。

これらの苦難は、ウィルフォード・ウッドラフ長老が第4代大管長に召された時期に直面した状況のほんの一例にすぎません。彼は教会を導いているときでさえ、公に姿を現わすことができず、総大会で愛する兄弟姉妹の前に立って話すこともできなかったのです。この困難な時代に、大管長として聖徒たちを守るため、ウィルフォード・ウッドラフ長老は主の助けを熱心に求める必要がありました。しかし、生涯のこの時期を迎えるまでに、彼はその重

責を果たすに十分な備えをしてきたのです。

主を信頼することを学ぶ

ウィルフォード・ウッドラフは、幼いころから主の力を深く信頼することを学びました。彼自身が書いた記録によれば、幾多の事故や苦難に遭遇し、その都度、主の慈悲によって助けられたのです。3歳の時、彼は熱湯の入った大がまに落ち込みました。また、父親の納屋の梁からすべり落ちて床に顔をたたきつけられたり、階段から落ちて片腕を折ったりしたこともありました。そのほかにも、雄牛に腹をけられる、馬車が引っ繰り返って積んでいた干し草に埋もれる、馬が丘を暴走して馬車ともども引っ繰り返る、4メートル半もある木の上から落ちて背中を打ちつける、おぼれているところを救助される、りんごの木の幹のくぼみに入

り込んでいるところを通りがかりの人に発見されて危うく凍死を免れる、木を切っていて、左足の甲におのを打ち込んで大けがをする、狂犬病の犬にかまれる、走る馬から振り落とされ、片足を2カ所骨折し、両足首を脱ぎゅうするなど、数々の事故に遭いました。しかもこれらはみな、ウィルフォードが20歳になる前に起こった事故なのです。

この後にも、水車のでっぺんから2度も落ちて、危うく圧死しそうな目に遭ったり、暴走する馬に引きずられたりしたこともありました。幸い不発でしたが、銃口がちょうど胸に向けられていたとき、偶然引き金が引かれたこともありました。また、木が胸に倒れかかって胸骨と肋骨を3本折り、左太ももと腰、腕にひどい打撲傷を負ったこともありました。

自分を守ってきたのは紛れもなく主の力であることを、彼が早くから認めていたのもうなずけます。晩年になって、彼はこのような数々の事故を振り

イギリスでの最初の伝道で、ウッドラフ長老はジョン・ベンボアの農場に導かれた。そこでは何百人もの人々が改宗し、バプテスマを受けた。



返り、次のように述べています。「それゆえ、私は最も陰悪な危機に遭遇していたときも、死から救おうと私に手を差し伸べてくださった驚くべき神のみ力を感じていた。今日私がここにあるのは、このみ守りのおかげである。」

思慮深い若者だった彼は、正しいことをしたいと思っていました。10代の前半、彼は次のように記しています。「この年代は、だれにとっても人生のうちで最も重要な時期だ。なぜなら、概して人の一生と永遠にわたる性格のほとんどがこの時期に形成されるからである。人生の旅路を歩みながら差しなかったこの大切な時期を過ごすに当たって、私は細心の注意を払っていかねばと感じている。栄えある永遠の生命へと続く道を歩んで行くために、注意力と分別、慎重さと知恵が必要であると思うのだ。」

真理を見いだす

絶えず導きを求め続けたウイルフォード・ウッドラフは、しばしば祈りを通して主と交わりました。そして、ついに福音を聞く機会に恵まれたとき、彼はこれを受け入れるにふさわしく準備されていたのです。

福音を紹介されたときの様子をウッドラフは次のように述べています。「集会はパルシファー長老の祈りによって始まった。彼はひざまずき、望んでいることをイエス・キリストのみ名

によって主に願い求めた。私は彼の祈る態度とそこから受ける力に非常に深い感銘を受けた。主のみたまが私の上にとどまり、彼が神の僕であることを証した。賛美歌を歌い終わると、彼は1時間半にわたって私たちに教えを説いた。パルシファー長老は主のみたまを豊かに受けて、モルモン経は確かに神から与えられた書物であることと、予言者ジョセフ・スミスの使命について力強い証を述べた。私は彼が言ったことをすべて信じた。それが真理であることをのみたまが証したからである……。

長老たちは、そこにいた私たちに今聞いたことについて賛同でも反論でも自由に立って話をするように言った。私は気がつく立ち上がっていた。長老たちが話したメッセージが真実であることを証するように主のみたまが私を促したのである。私は隣人や友人たちに対して、宣教師たちに反対しないように熱心に勧めた。なぜなら、彼らはまことに神の僕だからである。彼らはその夜、私たちにイエス・キリストの純粋な福音を宣べ伝えたのである。私が腰を下ろすと、私の兄アズモンも立ち上がって、同じような証を述べた。そして、彼の証に続いて、さらに数人が証を述べた。」

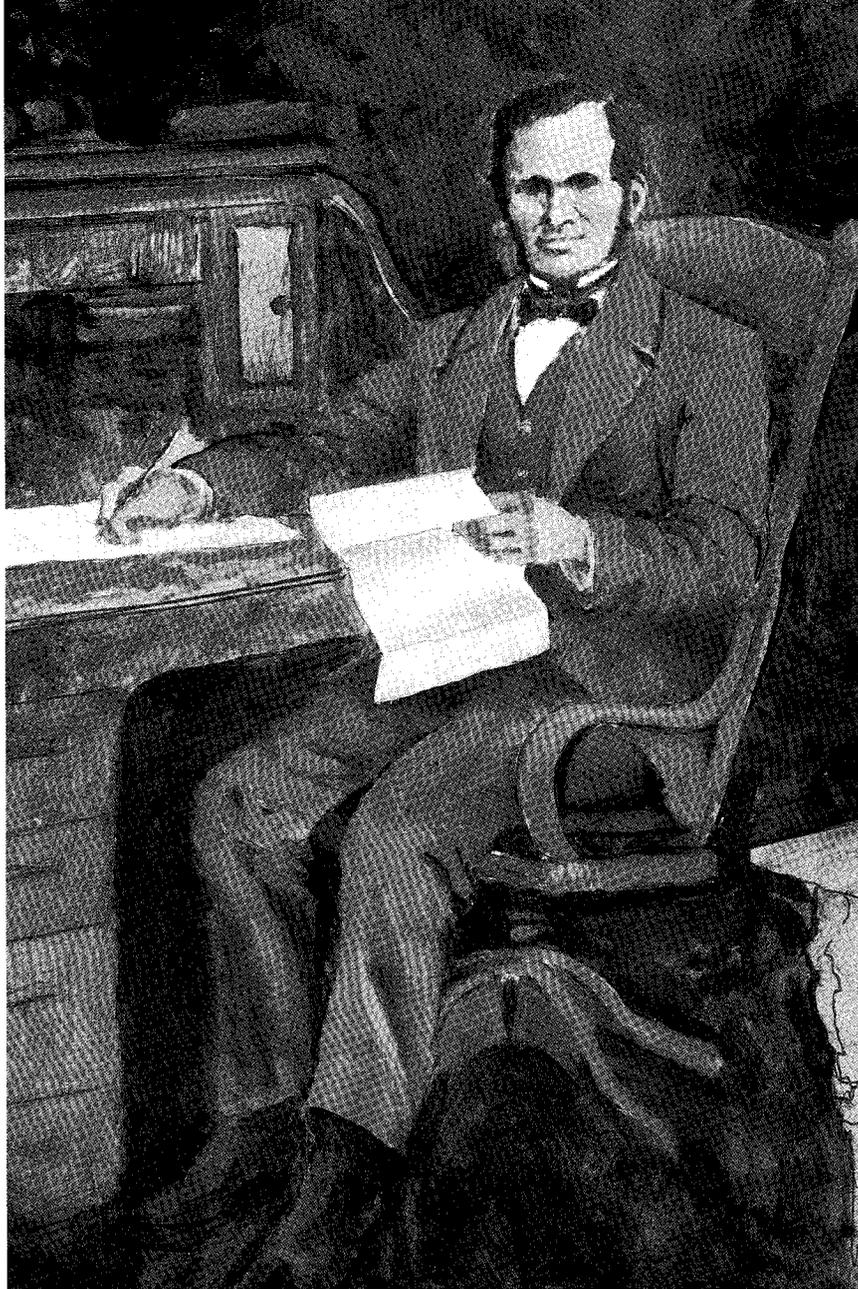
それから3日後の1833年12月31日、ウイルフォードはモルモン経を熱心に探求した後、バプテスマを受けました。彼はそのときのことを、次のように記

しています。「雪が90センチほど積もった寒い日だった。バプテスマの水には水と雪が混じっていたが、私は寒いとは感じなかった。」

教会歴史を記録する

ウッドラフは、この後すぐにカートランドへ行き、予言者ジョセフ・スミスに会いました。そしてこのカートランドからほかの新しい会員たちとともに、予言者が率いるシオンの陣営の行軍に加わりました。この期間中にウッドラフは、みたまに「促されて」教会の歴史上重要な出来事を記し始めたのです。彼は後に、この天よりの指示について次のように述べています。

「悪魔は、私が生まれた日からきょうに至るまでほかのだれに対するよりも激しく私の命を奪い去ろうとしてきた。私は悪魔のかっこうのえじきだったのかもしれない。これには、たったひとつだけ理由が考えられる。すなわち悪魔は、私が末日聖徒イエス・キリスト教会に入ったならば、この教会の歴史を書き、予言者や使徒たち、それに長老たちの働きと教えに関する記録を残すであろうと知っていたからである。私は予言者ジョセフから聞いた説教と教えをほとんど全部記録してきた。また私は、ブリガム・ヤング大管長やオルソン・ハイド、パーレー・P・ブラットやそのほかの人々の説教を数多く日記に記してきた。私が初期の時代



「私は悪魔のかつこうのえじきだったのかもしれない。……すなわち悪魔は、私が末日聖徒イエス・キリスト教会に入ったならば、この教会の歴史を書き……残すであろうと知っていたからである。」

に記録に力を入れ始めたもうひとつの理由は、このころに任命された教会の歴史記録者たちがほとんど背教し、記録を持ち去ったからである。」

みたまに導かれて

若きウイلفォード・ウッドラフはシオンの陣営に加わった後すぐに、宣教師として合衆国南部、カナダ、合衆国北東部に赴きました。ここに彼の偉大な宣教師としての生涯が始まったのです。彼は、行く先々でしばしばみたまの導きを体験しました。伝道地を出て、改宗者の一行がシオンに集まるの

を支援していたときのことをウッドラフ長老は次のように記しています。

「ニューイングランドとカナダで2年半を費やして、改宗者を得た後、私はマサチューセッツ州のボストンから来た100人ほどから成る最後の団と一緒に帰途に就いた。夕暮れ時にペンシルベニア州ピッツバーグに着いたが、私たちはそこにとどまらずにミズーリ州セントルイスへ向かいたかった。見ると蒸気船がちょうど出発の準備を終えたところであった。私は船長の所へ行って、何人くらい乗っているか尋ねた。『350人です。』『あと100人ほど乗せてもらえないでしょうか。』『いいで

すよ。』しかし、みたまが私に『あなたも同行の者もその船に乗ってはいけない』とささやいた。私はみたまに『わかりました』と答えた。私は、このような静かな細い声をこれまでも幾度か経験してきた。それでその蒸気船には乗らず、次の朝まで待つことにした。出港して30分後、その蒸気船で火事が起きた。この船は動力の伝達にチェーンの代用としてロープを使っていたため、岸までたどり着くことができなかった。夜も更けていて助かった人はひとりもいなかった。もし、私が内なる訓戒者の言葉に従っていなかったならば、私も被害者のひとりとなっていたであろう。

私は、みたまに満たされ導かれていた。私はこのみたまについて熟知していた。それはトランペットの音色でもなく、また雷鳴や稲光でもなく、静かな細い声であった。」

ウッドラフは32歳の時、すなわち、1839年にミズーリ州のファーウェストで使徒に聖任されました。



福音を宣べ伝える

多くの教会員はウイルフォード・ウッドラフ長老のことを偉大な宣教師であると思っています。ヒーバー・J・グラントは彼のことを、「おそらく〔ウイルフォード・ウッドラフ〕は、これまで当教会に改宗した者のうち、最も偉大な人物である」と語りました。（「大会報告」1942年4月）そのころ、彼はすでに2回伝道に出ていましたが、彼の最もよく知られた伝道の業は、イギリスにおけるもので、これは1839年に始まりました。

33回目の誕生日にウイルフォード・ウッドラフ長老は、イギリスのハンリーの町で福音を宣べ伝えていました。彼は、その地で大きな成功を収めました。ですから主が彼に南へ向かうよう命じられたとき、彼は驚きました。彼は文字どおり導かれて、バーミンガムのすぐ近くにあるジョン・ベンボアの農場に着きました。そこでは、ユナイテッド・プレズレンとして知られるグループが心をひとつにして、完全な福音を携えた僕を送ってくださるよう主

「〔セントジョージ神殿にいた）私の周りに死者の霊が集まり、なぜ私たちが彼らの贖いをしないのかと尋ねてきた。……彼らは、合衆国が独立宣言をしたときの署名者であった。」

に祈っていたのです。

ウッドラフ長老はこのグループの中の45人の説教者と160人の会員にバプテスマを施しました。福音を宣べ伝えたかどで、ウッドラフ長老を逮捕するよう遣わされたある警官は、この力強い宣教師の説教を聞いた後、教会に加わりました。集会の内容を偵察しに来た英国国教会のふたりの地方役員もウッドラフ長老の手によってバプテスマを受けることを願いました。

ウイルフォード・ウッドラフ長老は、1840年の1年間に336人を教会に導きました。それからウッドラフ長老とそのほかの兄弟たちは、予言者ジョセフ・スミスの召しに応じておおぜいの改宗者たちを連れて故郷に向けて出帆しました。

みたまの声に従う

この伝道を終えた後、ウッドラフ長老は、ノーヴー神殿の建築に尽力し、聖徒たちがロッキー山脈を越える準備に奔走しました。その間も、彼はみたまのささやきに対する鋭い感受性と信

仰のおかげで非常に霊的な経験をしました。

次の霊的经验は、ウイルフォード・ウッドラフがいかに天父と親しく交わっていたかをよく物語っています。

「私の伝道は、啓示のみたまによって行なわれた。私は、同じ静かな細い声によりフォックス諸島〔合衆国北東部沖の島〕に行くよう告げられた。それはカートランドでひどい背教が起っていたときだった。主のみたまが私に『同僚を得て、フォックス諸島へ行きなさい』と言われた。私のフォックス諸島に関する知識は、コロブ（アブラハム3：9参照）に対する知識と同様でまったく無に等しいものであった。しかしながら、私はそこへ行き100人にバプテスマを施した。」

ひどいあらしの中で、道に迷ってしまったときのことを、彼は次のように語っています。「壁を伝う盲人のように手探りをしていたとき、突然明るい光が私たちの周りを照らし出し、湾のかけっ縁にいて危険であることを教えられた。その光は、私たちが道を見つけるまでずっと私たちとともにあった。再び暗やみとなり雨が降り続いたが、私たちは喜びながら旅を続けた。」

このほかにも、夜彼が馬車を止めて、その中に家族とともに寝ていたとき、声がして「起きて馬車を動かさなさい」と言われました。ほんのしばらくの後、つむじ風に巻かれた大木がそれまで馬車を止めておいた所に倒れたの



THE ILLUSTRATION OF THE FLAG ON THE TEMPLE IS BASED ON A HISTORICAL PHOTOGRAPH.

1896年1月4日、ユタ準州が合衆国で45番目の州に昇格した。聖徒たちとともに喜ぶウッドラフ大管長と副管長のジョージ・Q・キャノン長老、ジョセフ・F・スミス長老。新しく献堂されたソルトレーク神殿に巨大な合衆国国旗が掛けられた。

身代わりのバプテスマを施してくれるように頼んだ。それは全部で100人に及んだ。」

ウイルフォード・ウッドラフは、決して時間や活力を浪費しませんでした。教会が迫害を受けていた時代、ウッドラフ長老は、身を隠さなければならない境遇にありながらも合衆国南西部に住むインディアンたちに福音を教えました。ウッドラフ長老は、彼らに対して大いなる愛と尊敬の念を抱いていました。当時72歳であった彼は、インディアンの人々とともにいることを好み、荒野にあっては狩りや魚釣りを好みました。偉大な宣教師であり、神の使者であった長老は、偉大な探検家でもあったのです。

当時のウッドラフ長老にも、つかのま、逃亡の身から解放されたことがありましたが、聖徒たちに対する迫害が最もひどくなり、再び身を隠さなければなりません。1895年、最愛の妻フィービーの葬儀にさえ出席できなかったこの偉大な人物の心境を察する

です。

宣教師としてロンドンにいる間、ウッドラフ長老は「悪霊の頭^{かしら}」に遭って恐ろしい経験をしました。「悪霊の頭がまさに私を負かそうとしたとき、私はイエス・キリストのみ名により天父に助けを求めて祈った。すると、私はひどい傷を負っていたにもかかわらず、彼を打ち負かす力を得たので、彼は私から離れ去った。その後、白い衣装をまとった3人の男性が私の所へ来て、私と一緒に祈ってくれた。すると私の傷は、すべて即座に癒^{いよ}されて、苦痛から解放されたのである。」

「セントジョージをたつ2週間前の

ことである。〔神殿にいた〕私の周りに死者の霊が集まり、なぜ私たちが彼らの贖^{あがな}いをしないのかと尋ねてきた。彼らはこう言った。『……私たちはあなたたちが享受している社会の基を作りましたが、決してその道を逸脱したことはありませんでした。むしろ、社会に誠を尽くし、神にも忠実でした。』

彼らは、合衆国が独立宣言をしたときの署名者であった。そして、私は二日二晩にわたって彼らの訪れを受けた。……私はすぐにバプテスマフォントに行き、マクアリスター兄弟を呼んでで独立宣言のときの署名者と、そのほかすでに亡くなった50人の著名人のために

ことができるでしょうか。

大管長であったときも彼は、常に自らの心を主に打ち明けました。すなわち、聖徒たちを正しく指導できるように、主の導きを求めたのです。1890年9月25日、ウッドラフ大管長は、「多妻結婚は、廃止されるのが主のみこころである」という有名な「公式の宣言」を世に顕わしました。

彼の教えと導きを施す業も終わりに近づいたころ、合衆国政府との緊張も次第に緩和していき、ウッドラフ大管長は1893年4月6日、ソルトレーク神殿を献堂し、1896年にはユタ準州が州に昇格するのを目にすることができました。これは聖徒たち自らの手で地元住民の指導者を選出できることを意味していました。

ウッドラフ大管長は、カリフォルニア州サンフランシスコで91歳の生涯を閉じました。彼は同胞と主によく仕え、福音を宣べ伝えるために28万キロ以上も旅をし、2,000人の人々を教会に導いて、バプテスマを施し、62年間にわたって7,000ページにも及ぶ教会歴史を書き記したのです。彼は宣教師であり、粉屋、印刷工であり、農夫、開拓者、植民者、政治家であり、主イエス・キリストの使徒であり、予言者でした。ウイルフォード・ウッドラフ大管長にとって、偉大な経験とは、堅固な信仰に燃えるような熱意を加えることにより得られるものでした。

この公式は私たち一人一人にも当てはまります。もし、自分自身の人生において、みたまの証を得ることを熱心に求めるのなら、私たちはそれを得るうえで必要な努力をしなければならないのです。□

ウイルフォード・ウッドラフ年表 1807—1898

年	年齢	出来事
1807		3月1日 コネチカット州ファーマントンで生まれる。
1821	14	製粉業に就く。
1833	26	12月31日 バプテスマを受ける。
1834	27	シオンの陣営の行軍に加わる。
1834—36	27—29	合衆国南部諸州で伝道する。
1837	30	フィービー・カーターと結婚する。
1837—38	30—31	合衆国東部諸州とフォックス諸島で伝道する。
1839	32	4月26日 使徒に聖任される。
1839—41	32—34	イギリスで伝道する。
1842	35	「タイムズ・アンド・シーズンズ」の営業部長となる。
1843—44	36—37	合衆国東部諸州で伝道する。伝道中ジョセフ・スミス の殉教を知る。
1844—46	37—39	ヨーロッパ伝道部の伝道部長となる。
1847	40	7月24日 プリガム・ヤングとともにソルトレーク盆地 に入植する。
1848—50	41—43	合衆国東部諸州の教会を管理する。
1850	43	準州議会議員に指名される。
1856	49	教会歴史記録者に任命される。
1877	70	セントジョージ神殿の神殿長に任命される。
1879	72	身を隠していた間、アメリカインディアンに伝道する。
1887	80	十二使徒定員会会長に召される。
1888	81	5月17日 マンタイ神殿を献堂する。
1889	82	大管長として支持される。
1890	83	多妻結婚廃止の「公式の宣言」を発する。
1893	86	4月6日 ソルトレーク神殿を献堂する。
1898	91	9月2日 カリフォルニア州サンフランシスコで死去。

参考文献

1. ウイルフォード・ウッドラフの日記と書簡、教会記録保管庫所蔵。
2. 『ウイルフォード・ウッドラフの歴史』「デゼレトニュース」8：18—22(1858年7月から8月にかけての記録)
3. 『ウイルフォード・ウッドラフ自叙伝』「タリッジ選集」第3巻(1883年10月から1884年7月にかけての記録)
4. ウイルフォード・ウッドラフ「日記からの抜粋」
5. マシュー・F・カウリー「ウイルフォード・ウッドラフ」

イスラエルでの演奏旅行で絶賛された タバナクル合唱団

モルモンタバナクル合唱団は、昨年12月26日から明けて1月6日までの12日間に及ぶ演奏旅行をイスラエルのエルサレムとテルアビブ、ハイファで実施した。

今回の演奏旅行はエルサレム市の市長であるテディ・コレック氏の招きによって実現したもので、5回の一般公演のほかにもエルサレムにあるブリガム・ヤング大学近東研究センターでの招待客を中心にした公演が行なわれた。

みづからタバナクルの大ファンであると公言するコレック市長は、公演を聴いて、合唱団をイスラエルに招へいたのは過っていないかとして次のような感想をチャーチニュース記者に語った。「タバナクル合唱団と比肩できる合唱団はほかに見いだせません。これまで数多くの合唱団の演奏を聞きましたが、やはりそう思います。」

コレック市長はタバナクル合唱団の訪問に先立つ昨年2月、十二使徒定員会会長ハワード・W・ハンター長老と同定員会会員ジェームズ・E・ファウスト長老がエルサレムを訪問した際に

タバナクル合唱団を公式に招いていた。

コンサートの白眉は、エルサレム交響楽団との共演による、エクトール・ベルリオーズのレクイエム『死者のための大ミサ曲』（「最後の審判」と栄光の主を描いたカトリックのミサ曲）で、エルサレムとテルアビブの2会場で演奏した。この作品は、大変大掛かりな編成を要するために音楽家たちの間では演奏が困難とされており、演奏される機会がきわめて少ない曲である。

エルサレム交響楽団の指揮者であるダヴィッド・シャロン氏は、このレクイエムの演奏で、ふたつのグループ、すなわち約300人から成るタバナクル合唱団と大編成のオーケストラを前にタクトを振った。聴衆の反応は熱狂的で、「通常は1、2度のカーテンコールの後、聴衆は帰宅を急ぐのですが、今回は演奏が終わってもだれも席を立とうとせず、何度も何度も演奏の続行を求めて拍手が鳴りやみませんでした。これほど長い拍手は今まで目にしたことがありません。エルサレムでこのような光景を見るのはきわめてまれなこ

とです」と、エルサレム交響楽団の理事長イェヘズケル・ペイニツシュ氏は語った。

『レクイエム』でのタバナクルの活躍については音楽関係の批評家たちの間でも評判を呼び、地元紙で絶賛されたこともあって、テルアビブで行なわれたオーケストラが入らない合唱団独自のコンサートでは、2,640人を収容できるホールが満席となったのみならず、立ち見席や通路にまで人が流れ込んだ。

このコンサートは、タバナクル合唱団の正指揮者ジェラルド・D・オトリ兄弟と副指揮者ドナルド・リップリンガー兄弟により演奏され、ヘンデルのクラシック曲からアメリカの民謡、『恐れず来たれ、聖徒』のような逆境時の曲、黒人霊歌など、さまざまな分野にまたがる曲が披露された。イスラエルの聴衆は、合唱団の演奏を聴いて、しばしば喜びと感動の涙を流した。

1840年から1841年に十二使徒のオルソン・ハイド長老は末日聖徒の宣教師として初めて聖地を訪れ、次のような示現を受けた。「ひとつの声が聞こえてきて、このように告げた。ここにはアブラハムの子孫がおおぜいいる。私は彼らを彼らの先祖に与えた土地に集合させよう。また、ここはあなたの働く場所でもある。あなたに示された町へ行き、ユダの民にこれらの言葉を告げなさい。エルサレムにやさしく語りなさい。」

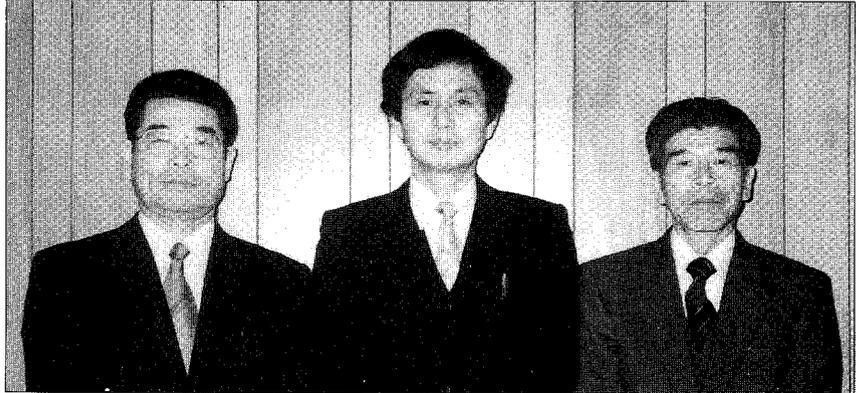
今回の演奏旅行に同行した七十人第一定員会会員のジェフリー・R・ホルランド長老はこの示現を引用し、303人のタバナクルの団員を前にして次のように語った。「現代の神権時代を振り返って、教会がこれほど強力に、直接エルサレムの人々に何らかのメッセージをもたらしたことはありませんでした。タバナクル合唱団は、エルサレムの人々にやさしく語りかけたのです。私たちは神の奇跡のすべてを完全には理解できませんが、合唱団の皆さんは、文字どおりハイド長老の示現の一部なのだと確信しています。」（「チャーチニュース」1993年1月2、9、16日付）



聖地で歴史的公演を行なったモルモンタバナクル合唱団

再組織された福知山地方部長会

昨年9月20日、カーチス・P・ウィルソン神戸伝道部長の管理の下に開かれた神戸伝道部福知山地方部大会で、それまで地方部長の責任を果たしてこられた^{たまやあきお}玉屋晃生兄弟が解任され、新たに^{かどわきやすふみ}門脇保文兄弟(写真中央)が地方部長として召されました。第一副地方部長には^{いのうたかしのり}井上孝兄弟(写真左)が、第二副地方部長には^{たけうちたもつ}竹内保兄弟(写真右)が召され、その任に当たります。



みたまに従う

神戸伝道部福知山地方部長
門脇保文

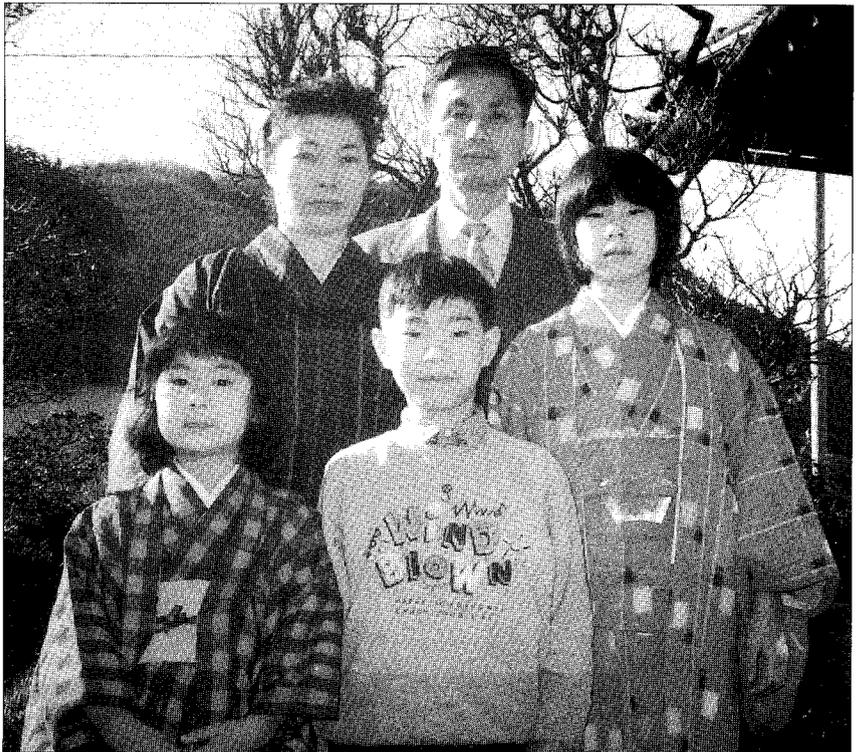
この教会を知ったのは22歳の時で、当時私は、田舎の青年団活動やバレーボール活動でリーダー的な立場で働いていました。いろいろな問題があり、人を指導する中で、何が真実で何がうそかを考え、また無責任なことを教えてよいのだろうかと思い悩みました。自分の良心までも痛めることが何度かありました。何か真理の原則があるのではないだろうか。こう真剣に考えている時、宣教師から神様が生きていると聞かされ、疑いながらも、もし神様が生きているのなら、すべてを捨てて神様のみ言葉に従おうと決め、バプテスマを受けました。

それから4年間は苦しい毎日でした。知恵の言葉、安息日、什分の一、純潔の律法と、友人たちは誘惑し、試してきました。「酒やたばこをやめて、何の楽しみがある。」「今どき、真実の宗教なんてない。みな人の作った教会だよ。上の者だけが甘い汁吸うとるんや、だまされとるんや。」「お金と暇がないと宗教なんてできんよ。お前、そんな

に金と暇があるのか。」「商売していて、酒も飲めんかったら、商談もできんやろう。』

このようなことを言われるたびに、心の中で「この教会は主の教会であり、真実の教会である。今は忍耐せよ。後の日に人々はあなたに感謝するであろう。あなたがあなたの町の人々を愛するがゆえに、教会が建てられるだろう」というささやきが聞こえました。

改宗4年目に、ロバート・T・スタウト伝道部長のビジョンで、兵庫県西脇市に伝道所を開設するためにアパートを探すように言われました。私が改宗した姫路支部は最寄りの教会とはいえ車で1時間かかる場所にありました。私の仕事である織布業は朝5時から夜10時まで稼働しています。改宗して4年間、仕事に出かけることに気が引けながらも、私は往復2時間の道のり



門脇保文地方部長ご家族

を日曜日だけでなくほかの集会にも集ってました。ところが西脇市は隣の町で家から15分で行けます。仕事の時間をあまり割かなくても教会に集え、しかも知人や友人、私の町の人々に福音が宣べられるようになるので、主に對する非常な感謝と喜びに満たされました。

しかし、アパートは見つかりませんでした。主は私に何を求め、望んでおられるのか、何が足りないのかを思い量る日が何日も何日も続きました。いくら捜しても見つからず、まさにあきらめかけていた時、友人の紹介で、環境の良い軒家を見つけて開設することができました。

私と4人の宣教師で、伝道活動が始まり、私はやがて支部長に召され、約10年間いろいろな経験をしました。中でも結婚相手を見つける際には画期的な導きがありました。夢の中で、神権者としての義務は何かをはっきりと教わり、結婚相手の姿まで見せていただいたのです。後に東京神宮で永遠の結婚をしました。

結婚して2年目の12月25日、この日「入院中の父が死ぬ」と、みたまがさきやきました。青少年のクリスマス会で一緒に発表することになっていたの

で、すぐに病院に行くべきか迷ってました。するとみたまが「安心なさい。一緒に行きなさい」とさきやき、発表が終わると、「早く帰りなさい」とさきやくので急いで病院に向かいました。

病院では、急に父の病状が悪化し危篤状態だったので、親戚じゅうが私を捜してました。父は、「後のことは頼むぞ」と言い残し他界しました。

父の入院中、妻には大変な苦勞をかけました。生まれたばかりの長女マリアを連れて病院に通い、父の看病をし、その合間を縫って毎日、慣れない私の仕事を手伝ってくれました。この時ほど、妻への感謝と、妻のすばらしさを感じたことはありませんでした。

父の死後、織物業を営む私たちに不況の波が押し寄せ、その波に家や工場、土地、財産まで飲み込まれてしまいました。しかし主はノアやニーフアたちに船を作らせたように、私にもみたまを通しサッカー織装置を作らせてくださいました。その方法は、従来の方法とは異なる原理で、人が思いもつかない方法で、常識から外れていました。

当時私は何もかも手放してしまい、いっそ織物業をやめて一から出直そうかと悩み苦しんでいました。それでも

私には仕事に対する未練があり、なんとかしたいとあれやこれや考えた末に、以前から思っていた革新織機と言われるスピードの早い織機用のサッカー装置を作ろうと決心しました。そのころ織機に詳しい人を紹介され、サッカー装置について話し合いをしている時、すばらしいヒントが与えられました。その夜、いろいろ考えてできるという確信を得、完成した装置を頭の中に描くことができました。私はすぐに鉄工所に行き製作に入りました。完成まで3カ月かかりましたが、この装置のおかげで不況の波の中からはい上ることができ、今日に至っています。

主は、これまでも何度も多く導きと試練と経験を通して信仰と証を強め、成長させてくださいました。主が確かに生きて私たちに導き、精練し、強めてくださることを証します。

また、世界一すばらしい妻の助けがあったからこそ、試練を乗り越え、今日の私があることも付け加えたいと思います。

ふたりの副地方部長は、主のみ業を推し進めるために、すでに前世より選ばれ、備えられていたすばらしい人たちであることも私は証します。(かどわき・やすふみ)

ロシアへ初の日本人宣教師 召される

ヒュー・B・ブラウン副管長の 予言の成就の先駆け

1967年4月20日、来日中のヒュー・B・ブラウン副管長は、阿倍野支部(現大阪ステーク部阿倍野ワード部)での特別大会で、日本人がロシアに伝道に行く日が来ると予言した。その予言の成就の先駆けとして、東京北ステーク部川越ワード部の水野博朗兄弟(20歳)が、ウクライナ・キエフ伝道部に召された。日本人初の専任宣教師としてロシアで伝道する水野兄弟は、

3月17日、2カ月の訓練を受けるためにユタ州プロボにある宣教師訓練センターに入所した。水野兄弟は東京外国語大学外国語学部の2年生で、専攻はロシア語である。

かつてスベンサー・W・キンボール大管長は会員たちに向かって、「私た

水野ご家族。博朗兄弟は左端



ちの中にヒンズー語を話せる人が何人いるだろうか。私たちは、主が『わが福音を携えてインドの地に行け』と命じられるとき、彼らを教える備えができていだろうか。』（『地の果てまで』「聖徒の道」1980年4月号、p.7）と問いかけている。ロシア語を学び、ロシアの人々に福音を説く備えをしてきた水野兄弟はこう語っている。

「教会員の家庭で生まれ育った私は、幼いころから宣教師に強いあこがれを抱いてきました。そんな私がロシアで伝道したいと思うようになったのは、祝福師の祝福を受けてからのことです。受験勉強に明け暮れていた高校3年生の6月、進路選択に悩み、自分に対する主のみ旨を知りたいと思い、祝福を受けたのです。その時、私は忠実であるならば近い将来主のみ業に召され、アジアの地で働くことを知りました。そこで大学を受験するに当たり、ロシア語が学べ、伝道に出るために2年間授業料を納めることなく休学できるといふ条件を満たしてくれる今の大学を選びました。自分の学力では到底無理と思われたのですが、よく祈り、みたまを感じながら受験できたことを覚えてます。

伝道に出る準備も一生懸命してきました。霊的な面では、安息日の礼拝はもとより、セミナー、インスティテュートで学び、ユースカンファレンスやサマーカンファレンス、ユースミッシヨナリーなどできるだけ多くのプログラムに参加して、霊性や社交性、指導性を養うように努めました。こうしたプログラムや、家族や多くの友人、兄弟姉妹の愛を通して、この教会が真実であることを知りました。また家族は永遠に共にいることができ、この福音が確かに人を幸せにするものであるという確証もたびたび得てきました。大学に入ってからの2年間はステーク部宣教師として働き、宣教師が行なう英会話に参加して多くの求道者と友達になり、宣教師に付いて実際に福音を宣べ伝え、伝道の訓練を積んできました。死者のための身代わりのバプテスマもよく受けました。家庭の夕べも大きな助けとなりました。

経済面では、アルバイトをして宣教

師の2年間分の自己負担金を全額ため、それ以上必要な場合は両親が援助してくれることになりました。体力的にも準備が必要だと思い、大学ではバドミントンをしていました。

大学受験もある意味では準備だったと思います。私は、伝道に出るにはこの大学に入るしかないと思っていたので必死に勉強しました。それでも安息日は絶対を守るようにしていました。どうしても休学という形で伝道に出なかったのが、受験に失敗したら教会が経営しているアメリカのプリガム・ヤング大学カリックスカレッジに留学しようと思い、TOEFL(トールフル。米国留学英語能力テスト)も平行して受けて基準点に達していました。

大学でバドミントン部に入ったのは、できるだけいろいろな人と交わりたと思ったからでもあります。伝道に出るためにただ教会に入りびたるのではなく、『世にあつて世の者とならず』の気持ちで、教会外の人々に良い模範を示そうというのが私の目標でした。

ロシア語の勉強が大変だと感じた時は、伝道のためと思うと頑張ることができました。

今回伝道に召されるに当たり、学校の友達や先生、アルバイト仲間に教会について詳しく話すことができたことを感謝しています。

今、私は、愛するウクライナの神の子供たちにこの真理を伝えられる喜びでいっぱいです。多くの困難もあると思いますが、全力で主のみ業に励みたいと思います。『いかなる汚れた者の手も、このみ業の発展を止めることはできない。迫害は威を振るい、暴徒は連合し、軍隊が集合し、中傷の風が吹き荒れるかもしれない。しかし神の真理は大胆かつ気高く、悠然と出で立ち、あらゆる大陸を貫き、あらゆる地方に至り、あらゆる国々に広まり、あらゆる者の耳に達し、神の目的は成し遂げられるであろう。かくして、大いなるエホバは、み業は成ったと告げられることだろう。』（『教義と聖約インスティテュート生徒用資料』p.11）□

日本人の伝道に関する教会幹部の言葉

ヒュー・B・ブラウン副管長の予言

「いつの日かロシア人にも私たちはこの福音を教えるときがやってくるのでございます。そして皆さん方のある人たちはロシアへ伝道に行くように召されるにちがひありません。畑は早白くして、その刈り入れを待つがゆえでございます。」（『聖徒の道』1967年5月号、p.9）

スペンサー・W・キンボール大管長の言葉

「現在、世界各国にはたくさんの日本人が住んでいます。

日本の方々はそれぞれの国の言葉を覚えて伝道することができるのです。もちろん日本における伝道は日本人の手で行なうべきだと思います。

この国に住む1億1,000万の人々に福音を説くことは皆様の責任です。次

いで皆様は、海を越えて大陸へ渡り、何億もの中国人に福音を伝えることになります。

もし日本の聖徒たちが、日本国内で現在伝道に携わっている1,000人の宣教師を賄えるとしたら、やがて1万人の宣教師が中国本土へ行くこともできるでしょう。」（『聖徒の道』1981年10月号、p.5）

マシュー・カウリー長老の言葉

「日本の地で、私たちは教会歴史上かつて見たことも聞いたこともないほどすばらしい伝道の機会に恵まれ……すばらしい機会を得ている。人々は私たちが宣教師を送ると、教会に入るのである。彼らは福音を知りたいと願っているのである。」（『真実の言葉』「インブルームメント・エラ」52:715。1949年11月）

片平美世姉妹をしのんで

我孫子ステーキ部水戸ワード部

松村玲子

片^{かた}平^{ひら}美^{みよ}世姉妹は1990年の7月1日にバプテスマを受け、1カ月後の8月1日、16歳という若さでこの世を去りました。美世姉妹が私の家の近くに住んでいたことを初めて知ったのは、お通夜の日の夕方でした。私は彼女と一度も話をしていなかったのです。親子ほども年齢が離れており、すぐに共通の話題が見つからなかったこともありましたが、とにかく一度も話をしなかったことが悔やまれてなりません。告別式の日、私はご両親の悲しみはいかばかりかと思いつつも、想像を絶するような苦しい闘病生活があったことをその時はまだ知りませんでした。

美世姉妹が亡くなられてから3週間ほどたった時、姉妹宣教師に誘われて彼女のお宅を訪問しました。お母さんは美世姉妹の闘病の様子や家族のことを涙ながらに話してくださいました。

美世姉妹が体に異常を感じたのは、中学校2年生になった4月でした。上の歯ぐきにしこりが見つかり、初めは八重歯がはえてくるのだろうかと思っていました。お母さんから歯医者に行くように勧められましたが、剣道クラブに入っていた彼女は忙しくもあり、大したこともないと思ってそのままにしていました。11月の初めによく歯医者に行き、レントゲンを撮ってもらった結果、八重歯ではないので国立水戸病院の口腔外科に行くように言われましたが、約1週間後に診察を受けたところ、それほど重大な病気でもなさそうだとされてほっとしました。

さらに1週間後、再び診察を受けた時、医師の顔色がみるみる変わりました。口の中の炎症が大きく広がって



片平美世姉妹。自宅近くにて

たのです。全身の検査が行なわれ、細胞癌^{がん}の疑いがあるので東京医科歯科大学で検査を受けるように言われました。検査の結果はやはり細胞癌の疑いが五分五分ということでした。手術をすることになりましたが、家に近い方が良くと判断して国立水戸病院で手術を受けることになりました。

年が明けて1月、国立水戸病院で歯ぐきの手術を受けました。順調に快復して退院し、3月には登校できるようになりました。3年生に進級し、10月には義歯も完成する予定でした。半年後、義歯を入れる日がやって来ましたが、ところがぴたりと入るはずの義歯が入りません。それは再発を意味していました。

放射線治療か手術かの選択を迫られました。お母さんは美世姉妹の顔に傷

をつけることを考えると、手術を受けさせるよりは放射線治療を望みました。しかし国立水戸病院の放射線治療機は古いため、病巣以外にも影響を及ぼして失明する恐れもあると医師から言われ、どう決断したらよいか困り果てたそうです。

美世姉妹は自分の病気が重大な病気であることに気づき、納得のいくように説明してほしいとお母さんに迫りました。いつまでも隠しておくわけにはいけないと思ったお母さんは事実を告げ、決断できずに迷っていることを話しました。すると彼女は、目はふたつあるのだからひとつを失ってもよいから放射線治療を受けるとお母さんに言いました。お母さんはそこまで美世姉妹が決心したのならと、放射線治療を受けさせることにしました。国立水戸病院の先生に、千葉市にある放射線医学総合研究所病院部には最新の放射線治療機があるので、そこで治療を受けた方がよいからと紹介され、11月に入院し、翌年1月まで放射線治療を受けました。

高校の入学試験を目前に控え、美世姉妹は勉強のことが気になりました。その気持ちを察した所長は美世姉妹に特別に部屋を与え、ひとりの医師を家庭教師につけてくれました。その部屋で勉強を始めましたが、ひとりりで寂しいのと放射線治療の副作用などもあり、勉強らしい勉強はととてもできませんでした。

3カ月治療を受けましたが、過酷にも効果はまったく現われませんでした。この結果にお母さんはがくぜんとし、何と美世姉妹に話したらよいか、言葉もなかったそうです。そのまま東京

医科歯科大学に入院するよう勧められましたが、美世姉妹の気持ちを考え退院しました。

1月に退院して間もなく私立高校の3校を受験し、全部合格しました。お母さんは美世姉妹に事実を話さないわけにはいかず、ほおを切り病巣を切り取る方法しかないと話しました。彼女は、先生がそうするより方法がないと言うのなら手術を受けるとお母さんに言いました。

1月末に東京医科歯科大に入院し、ほお骨を切り取る手術を受けました。手術後看護婦さんは気遣って個室を勧めてくれましたが、お母さんはいずれ手術した顔を世の人々の前にさらさなければならぬのだからそれに慣れていた方がよいと思い、美世姉妹も同意して、6人部屋で術後の生活を送りました。

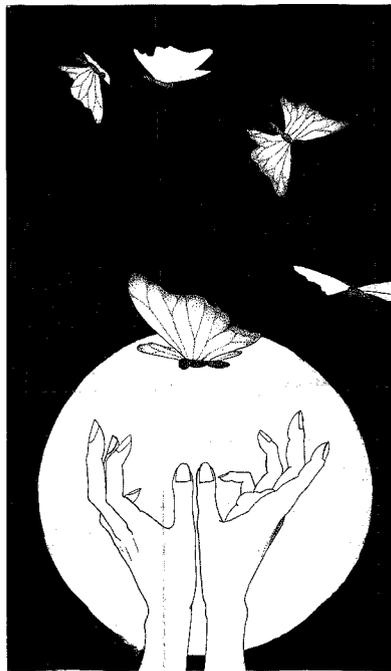
このような大手術を受けたにもかかわらず、美世姉妹は県立高校の受験になんとしても行かせてほしいと言い続け、その熱意に医師も両親も負けて、受験日の前日自宅に帰りました。翌日県立高校の保健室で高熱と痛みに耐えながら受験しましたが、力尽き途中で寝込んでしまいました。お母さんは、美世姉妹が食事も立つこともできず、両わきから抱えられるようにしながら県立高校を受験したのは、中学生活に区切りをつけたかったのではないかと伝えておられました。病院へ帰った時、先生、看護婦さん、部屋の人たちが拍手で迎えてくれました。部屋の人たちは美世姉妹の姿を見て大いに励まされたようです。

手術後の機能訓練は大変つらいものでした。ほお骨と肉を切り取ってしまうと皮膚が萎縮して、口を開くことも物をかむこともできなくなってしまう。そのため木製の舌庄子(舌を下方向に押さえるのに用いるへら)を上歯と下の歯の間に入れ、さらに木でできている大きな洗濯ばさみのような物を口の中は差し込み、口を無理に開ける訓練を続けなければなりません。美世姉妹は痛さに涙を流しながら耐えました。水を飲んでも下を向くと鼻から水が出てしまいます。手術をしなかった側に少しずつ流し込んで飲む

練習もしました。食べ物は小さく薄く切つてようやく口の中に入れることができます。顔の外形を保つため、口の中には普通の人でもなかなか入らないような大きな義歯を入れなければなりません。一度入れたら取りたくないものですが、食事のたびに取出して口をすすがなくてはなりません。ほんの少ししか開かない口の中に大きな義歯を入れたり出したりしなければならぬのです。どんなにつらく苦しかったことか想像もつきません。それでも両親に対して文句を言ったり恨みがましいことを一度も言わず、明るく前向きに闘病生活を続けました。

眠れない夜も何度もありました。そんな時、病院の食堂に行きスケッチブックに絵を描きました。美世姉妹はとても絵が上手で、自分の顔や美しい女性の顔をたくさん描きました。

やがて隣の部屋に入院していた同年代の女性と友達になり、病気のことや将来のことなどを話し合うようになりました。ある日彼女は宣教師から福音を学んでいることを美世姉妹に話しま



亡くなる少し前に片平姉妹が描いた絵。初めちょうは手の上の1匹だけだったが、お母さんに1匹だけでは寂しすぎると言われて、後で描き足した。まだ未完成。

した。宣教師の話と一緒に聞くように誘われた美世姉妹は、初めて宣教師から福音や教会、モルモン経について聞き、モルモン経を渡されて読み始めました。また、水戸にも教会があることを知りました。

9カ月の闘病生活の後、美世姉妹は1989年10月4日に退院しました。退院して間もなく水戸の宣教師から電話がありました。病院で宣教師を紹介してくれた友人が、水戸の宣教師に連絡してくれたのでした。こうして美世姉妹は本格的に福音を学ぶことになりました。お母さんは退院して間もない美世姉妹の体力を考えると、宣教師に会うことに反対しました。普通の人のようにスムーズに食事ができず、1回の食事にかかなりの時間がかかるため、約束の時間によっては食事を抜いてしまうこともあったからです。

外出する時はいつもお母さんと一緒でしたが、宣教師に会う時と教会に行く時はひとりで行くからと言ってお母さんが一緒に行くのを断りました。「私が反対していたからでしょう」とお母さんは述べられています。

1990年3月、美世姉妹は整形手術を受けるために再度東京医科歯科大学に入院し、無事手術を終えて退院しました。

4月にはあこがれの高校生になりました。学校まではバスで通学しました。掃除当番も、病気を理由に怠けるようなことはしませんでした。ほかの生徒が怠けて美世姉妹がひとりで教室の掃除をすることもたびたびでした。「お前も掃除しないで帰ってきたらいいだろう」と言うお母さんに、「自分たちが勉強している教室の掃除を怠けるなんて私にはできない」と美世姉妹は言い、ひとりで掃除を続けたそうです。その熱意がひとりの生徒に伝わり手伝ってくれるようになりました。美世姉妹は決して自分を甘やかすことはしませんでした。

クラスマッチにも参加しました。宣教師との福音の勉強も続けました。将来歯科衛生士になりたいという希望を抱き、図書館に通って勉強もしました。学校の行き帰りだけでも体力を消耗しきってしまう美世姉妹を見て、高校に

進学させるのではなかったとお母さんが思ったほどでした。

その上日曜日に教会に行く美世姉妹に、お母さんの心配は募るばかりでした。ですからバプテスマを受けたいと美世姉妹が言った時、お母さんは体力が回復するまで待つようにと反対しました。しかし美世姉妹の決心は強く、「宣教師を助けることのできない私にとって、できることは私が教会に行くことだけなのだから行かせてほしい」とお母さんを説得して、ついに7月1日にバプテスマを受けました。

お母さんは「美世姉妹が闘病生活を頑張れたのは、家族の支えと周りの人人の温かい愛があったからです」と言われました。美世姉妹の入院中はお母さんがずっと付き添い、家はお父さんとお姉さんが守りました。お姉さんの美穂さんは高校のクラブ活動のため帰宅が遅くなりましたが、電車を降りると閉店間際のスーパーに駆け込んでその夜のおかずを買って帰り、夕食の仕度をして帰りの遅いお父さんの帰宅をひとりで待つ生活が続きました。進路についても両親とじっくりと相談する時間を持てなかった美穂さんは、看護婦になる道を選び、ひとりで看護学校を見て歩きました。彼女は自分に一番

ふさわしい看護学校を選んで受験して見事に難関を突破し、看護学生として勉学に励み、今年3月に卒業しました。

片平家族は深い愛のぎざなでしっかりと結ばれていました。美世姉妹はお母さんを独り占めにしてお姉さんに済まないと、いつもお姉さんのことを心配して、自分の病気の苦しさについては決して不平を言いませんでした。姉妹宣教師も美世姉妹に会っている間、彼女が一度も病気のことを口にせず、苦しいとか、つらいとかという言葉を一ひと言も聞いたことがなかったので、こんな大きな病気をしていたことはまったく知らなかったそうです。

念願のバプテスマを受けて教会員になった喜びもつかのま、7月19日の夕方、美世姉妹は激しい頭痛に襲われ国立水戸病院に入院しました。そして人人の願いもむなしく、家族や美世姉妹の治療に当たってくださった東京医科歯科大学の先生方、国立水戸病院の先生方に見守られ、8月1日、静かに息を引き取り、来世へと旅立ちました。治療に当たられた先生方は、美世姉妹が高校に通ったことは奇跡としか言いようがないと、その強い精神力を心からたたえられました。

美世姉妹の教会員としての生活はわ

ずか1カ月しかありませんでした。17年足らずという地上での短い生涯でしたが、美世姉妹は病気と闘いながらも前向きに明るく、愛と勇気をもって生き抜き、ご家族も愛をもって彼女を支えられました。美世姉妹のこの世の生活は、人間の目には短かく見えても、現世で学ぶべき事柄を十分に学んで神様のみもとに帰って行ったのではないのでしょうか。美世姉妹が亡くなる少し前に描いた絵からも、自分がこの世から間もなく去って行くことを知っていたのではないかと想像されます。お母さんもそのように思われたようです。

記事をまとめるに当たりたびたび片平家を訪問し、身を裂かれるようなつらいお話を何度もお願いしたにもかかわらず、快くお話しくださったお母さんに心から感謝しています。

最後に美世姉妹が最後の入院の2日前に書いた日記を紹介させていただきます。「7月17日。きょうは3者面接。顔がいたかった。町田さん、ゲージさん(注——ともに姉妹宣教師)が来てくれて本当にうれしかった。いつも笑顔をたやさない人たちがとてもすばらしく思える。私の友達に感謝。」(まつむら・れいこ 日曜学校教師)

「わたしのくびきを負うて、 わたしに学びなさい」

札幌伝道部専任宣教師
内田征児

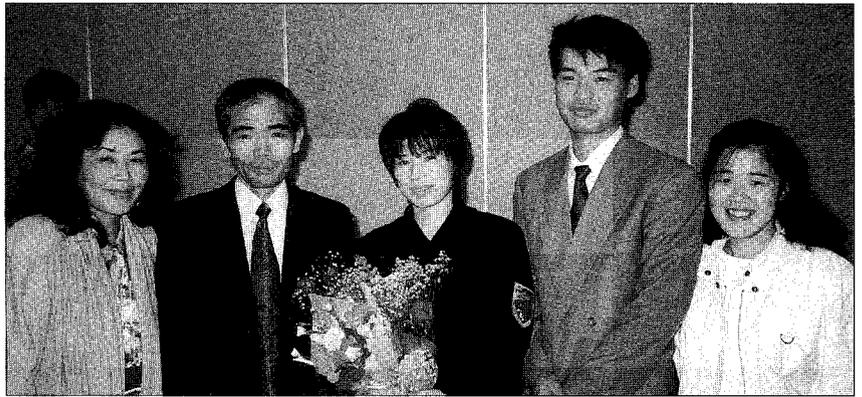
初めて私が宣教師と会ったのは、1989年の4月でした。2年後の1990年3月に改宗し、さらに2年後の1992年6月に伝道に出て、現在札幌伝道部で奉仕しています。

宣教師に会ってから今に至るまでに、私の人生は180度変わりました。宣教師に会うまでは、大変すさんだ生活を

送っていて、一時は暴力団に入ろうかと本気で考えたこともありました。仕事をしてもいつも続かず、自分を心に留めて心配してくれる多くの人を裏切り、また傷つけ、両親にも迷惑を続けていました。私の家は商売をしていて倒産してしまい、両親は本当に苦労しました。特に母親は、家や私、妹

たちのことを思い、信じられないほどの犠牲を払い続けていました。私たちのことを心から愛してくれており、またそれをよく自分自身感じて理解していたにもかかわらず、私は母親の期待とはまったく逆の方向へ自分の人生を押し進めていっていました。宣教師に出会う前まで、人生を少しずつ狂わせ

内田征児長老(右から2番目)。1991年12月、バプテスマを受けたばかりのご両親(中央)とともに。



ていたのです。

家を出て名古屋に住んでいる時、ふたりの宣教師が私のアパートを訪問してくれたのをきっかけに、自分の人生について深く考えるようになりました。宣教師の「仕事を辞めて伝道に出てきました」という言葉と心からのやさしい笑顔、また仕事を辞めてまで伝道して伝えている「救いの計画」という言葉が強く心に響きました。モルモン経をもらい、福音を学ぶことになりました。今でも、ふたりに会い福音を聞いていなかったらと考えると、とても恐ろしくなります。私はそれまでほとんど漫画しか読んだことがなかったので、とにかくわかりそうな所から、少しずつモルモン経を読んでいきました。モルモン経を読みながら、私は自分の生き方が大きく間違っていることを、いやというほど思い知らされました。

しばらくして、私は引っ越しをして島根の実家の方へ帰ったために、福音の勉強は一時中断しました。地元の松江ワード部という所で再び宣教師の話聞き始めましたが、知恵の言葉でつまづき、そのまま教会を離れてしまいました。けれどもなぜかモルモン経は気になり、少しずつ読み続けました。読めば読むほど心に罪の重みを感じ、その苦しみから逃れることができなくなりました。「それであるから、このような者がもしも悔改めをせず、神の敵であるまま生涯を送って死ぬならば、神の正義の要求はその者の不滅の霊を呼びさまして自分に罪のあることを強烈に感じさせる」とあるとおり、私は「罪の自覚と苦痛と憂いと〔が〕胸に充ちて」(モーサヤ2:38)1年間を過ごしました。けれども同時に、モルモン経や聖書の中から多くの慰められる聖句も読み、よく涙を流したものです。「すべて重荷を負うて苦労している者は、わたしのもとにきなさい。あなたがたを休ませてあげよう。わたしは柔

和で心のへりくだった者であるから、わたしのくびきを負うて、わたしに学びなさい。」(マタイ11:28-29)

私にはどうしても主の助けが必要でした。そのために教会で聖霊を通して主について学ぶことは、必要なことでした。私は自分から電話をし、また宣教師から福音を学び始めました。その時の宣教師も謙遜で、とてもすばらしい方でした。

福音を聞き始めると、自分自身悔い改めて自分を変えていく必要を切実に感じました。私は並々ならぬ努力を払わなければなりませんでしたが、それでも戒めを守り、それまでの自分を改める努力を続けました。友人や後輩は驚いて、いろいろなことを私に言いました。本当にかげの下からはい上がっていくような気持ちでした。

松江ワード部の会員たちは、目つきも悪く、外見もおよそ教會的でない私をととてもやさしく迎え、よく声をかけて、心配したり励ましたりしてくださいました。初めて家庭の夕べに招かれて、「日本の中にもこんなに家族の愛が深く、一緒にいるだけでぬくもりを感じることで家族があるんだな」と感動した夜のことを、今でもはっきりと覚えています。教会の皆さんの愛のうちにおれたことを感謝しています。

そのような中で、神様は私が良い方向へ向けて努力するときに、よく褒めてくださいました。ごみをきちんとごみ箱へ捨てる習慣のなかった私が、道端のごみを拾ってごみ箱へ捨てるようになりました。そのころの私にとってそれは、信じられないほどの変化でした。なぜなら、自分の悪いところを、

できることから改め始めたからです。主は私を見守り、褒めてくださいました。少しずつ小さなぬくもりを心に感じるようになり、イエス様や神様が私を心に留めてくださっていることを、悔い改めを通して知ることができました。教会に入り、皆さんにやさしくしてもらい、皆さんの愛を通して2年3か月を過ごすことができました。

昨年6月に東京にある宣教師訓練センターに入所し、宣教師としての生活を始めました。最初は、どんな人が来るんだろう、所長はどのような方だろう、というような不安がありました。しかし、宣教師訓練センターはすばらしい所でした。それまでの人生の中で、一番充実した2週間を過ごすことができました。センターでは、宣教師全員が一致してルールを守り頑張るときに、朝起きてから夜寝るまで一日中聖霊がともにあり、イエス様のことを証するときに主の愛が皆とともにありました。ハリソン・テッド・プライス所長からは、実に多くのことを2週間で学ぶことができました。それでも学びたいことやしたいことが多すぎて、1日24時間では、時間がとても足りないような気さえていました。

私は訓練が始まって3日目に風邪で半日ダウンしました。その時、ラモーナ・プライス姉妹が特別にチキンスープを作ってくださいました。食べる前に所長ご夫妻と私で祈った時、胸から熱いものが込み上げてきました。「今自分はこうしてすばらしい指導者と姉妹に心から愛されている。3年前は人を傷つけることしかできなかった自分が今ここにいて、少しでも人のために働く機会を与えられ、たくさんの人に

愛され、主から愛されている。」聖霊を通して改めてこのように強く感じ、祈りながらきれいな涙を流せることに心から感謝しました。この時3人で祈ったことは一生忘れることはないでしょう。

私は今、札幌でたくさんの方のすてきな人々に会い、毎日イエス様について証をすることを許されていることに、非常な喜びと感謝の気持ちを覚えています。すばらしい伝道部長と同僚たちから、熱心に仕えること、祈り、愛のこもった心からの証など、多くのことを学んでいます。つらくなるときもありますが、主がそれを喜びに変えてくださるという大きな希望はいつもあります。なぜなら主は私たちすべての人を愛し、心に留めていてくださるからです。

私の出会った多くの人たちと神殿で再会するのを楽しみにしています。また私たちと出会い、ともに学んだ人々が、本物の幸せを見だし幸福になることを楽しみにしています。主が私たちを心に留め愛してくださるように、私たちも主を心から愛し、すべての人を心に留め愛さなければと思い、毎日を過ごしています。

「この福音をあらゆる国民、あらゆる人々に宣べ伝えるのは、私たちの義務であり、責任であり、神の命令である」(『地の果てまで』「聖徒の道」1980年4月号、p.4)と、スペンサー・W・キンボール大管長は語っています。主は、聖句や予言者の言葉を通して私たちに伝道に出るように言っておられますが、宣教師自身にとっても、伝道は何物にも換えることのできない、すばらしいものです。そして、宣教師訓練センターは本当にすばらしい所でした。準備できていない人も準備できている人も急いで主のみもとに行くなら、足りない人は十分に満たされ、足りている人はさらに増し加えられることを約束できます。

私たちが主を愛し、隣人に心を留め、従順であるときに、主は思いもしないほどの大きなプレゼントをそっと与えてくださることを知っています。(うちだ・せいじ 岡山ステークス部松江ワード部出身)

3,317人を動員した巡回音楽伝道

「セージの歌」

——好評のうちに17回の公演を終了——



昨年6月27日、名古屋西ステークス部一宮ワード部にて

教 会員でない方々1,091人、教会員2,226人。この数から皆さんは一体何を想像されるでしょうか。名古屋地区のインスティテュートに集う会員たちや、音楽を通して伝道したいという会員たちにより、1992年1月から準備を始め進められてきた、巡回音楽伝道「セージの歌」の公演を聞きに来られた人の数です。昨年5月16日の初演以来12月19日までの7カ月間に、名古屋、岡崎、豊橋、金沢、三重、岐阜、大垣などのワード部、支部の延べ17カ所を、同じ企画で公演して回り、あまり例のない巡回コンサートとなりました。

車の火災により幼い少女セージが耳を失うほどのやけどを負う試練の中で試される家族や友人の愛と信仰、そしてセージの清らかな心と信仰に救い主が導きを与えられた実話を、ナレーターが心を込めて語ります。(『イエスさまもまえにわたしのようなこどもでした』「聖徒の道」1991年3月号、pp.25-29参照)それを盛り上げるように「歌う宣教師」として組織された50人以上から成る合唱団のオリジナル曲や賛美歌などの霊的なデュエット、コーラス、さらにスライドによる映像で構

成されました。

1991年度の東京東ステークス部の公演に引き続き、名古屋地区でもこの公演を指導してきた名古屋インスティテュート・ディレクターの西原雄二兄弟はこう語っています。

「初めに私の心の中に生じてきた伝道のビジョンがありました。壮大なパノラマに悠然と、しかもきわめて静かに暮れゆく夕日を見てだれもが感動するように、だれもが感動し、主のメッセージに触れることができる伝道方法はないのでしょうか。それは巡回音楽伝道です。『この伝道の事業が偉大なものであることを予想していた』(アルマ17:13)のです。主はすばらしい人々を集めてくださいました。彼らは信仰や能力を主から与えられていました。主は彼らをお使いになりました。」

どの公演も「みたま」によって歌い、歌によって証し、多くの方が主の愛を感じ、喜びと感動を分かち合う場となりました。それは数字にもよく表われています。この一連の公演も終盤を迎えて、岡崎ワード部97人、三重地方部118人、豊田支部108人、名東南・北ワード部合同最終公演には202人の教会

員でない方々が、各ユニット主催の公演に来られました。教会員たちが信仰をもって喜んで家族、友人、知人を招待し、宣教師が伝道の機会としてよく活用したからでしょう。

約80人の兄弟姉妹が合唱団やスタッフとして参加し、その中には公演を聴いて参加を望んだ教会員でない方や教会に戻ろうと決心されたお休み会員の方もいます。この公演を聴いてバプテスマを受ける決心をした求道者の方も何人もいます。各公演で集められた教会員でない方々のアンケートには、このような感想が寄せられています。

●とても感激、感動しました。私はまだ宣教師からお話を伺い始めて2回目ですが、神の教えについて学ぶ機会が持てたことに今とても感謝しています。公演を開いてくださった皆さん本当にありがとうございます。皆さんと私も歌いたいです。(この方は公演後、バプテスマを受けたいと宣教師に話し、1週間後のクリスマスの日にバプテスマを受けられました)

●見る前は、神様のことをあまり知らなかったし、考えたこともなかったけれど、きょうの公演を見て、神様についていろいろなことを知り、大変なためになった。

●「セージの歌」(主題歌)が大好きです。聴衆も一緒になって歌った最後の合唱は、心がいっぱい歌えませんでした。きょうこの時、この出来事は忘れません。また明日からも頑張ろう、セージのように。

●若い方々がこの公演に情熱を傾けていらっしゃることに感動しました。信仰の力の強さをも感じました。神様を信じることでできる心を持つとは、こんなことなのかという気持ちです。

合唱団やスタッフにとって1カ月に2回、3回の公演は決して楽なものではありませんでした。しかし、練習、合宿、公演という経験が一人一人にとって霊的な活動の場となり、学んだ福音を実践する場となって、喜びをもたらしたのです。

西原兄弟はこうも語っています。「『ああ私が天使になって私の心の願いを達することができたら善いものを。私の願いとは出て行って神のラッパの

ように地を震わせる声で話し、万民に悔改めをすすめることである。』(アルマ29:1)地を震わすほどの声ではないとしても、まさに私たちはこのアルマの願いを味わっているのではないのでしょうか。主は特質の違う多くの人々が集まるなら、ひとりでは成し得ないことができると教えてくださいました。この世的なものの中にあって、『セージの歌』の公演は霊的な戦いです。日本の同胞の心の壁を取り除く、『みたま』と純粋な愛に満ちたこれまでにない伝道の方法です。私たちは主の器なのです。」

「セージの歌」の公演は、この名古屋の地で主のために信仰をどのように使うか、何をなすべきか、一致とは何か、主のみ業がどれほど偉大であるかを教えてくれました。そして、ビジョンを行ないに移すことによって奇跡がもたらされたのです。(レポーター——池田二三代 名古屋ステーク部若い女性第二副会長)

歌を通して もう一度 分かち合う福音



名古屋西ステーク部高畑ワード部
庄司敦子

「あなたにはなすべき務めがありますよ」と大やけどを負ってこん睡状態の時にイエス様から語りかけられたセージ。私がそんなセージと出会ったのは去年の5月のことでした。

私は伝道から帰ってきて数年間、教会から遠ざかり、もう二度と戻ることはできないだろうと思っていました。しかし冬の寒い日にお休み会員をわざわざ訪ねてくれた宣教師の深い愛や、

温かく迎えてくれたワード部の会員のやさしさもあって、去年の1月から戻るできるようになりました。そしてある時、教会の掲示板を見ていたら、「セージの歌」と題するコンサートの案内が目にとまりました。私は音楽が好きということもあって、心の中に「行きたい」という気持ちを感じ、5月の初回公演を見に行きました。セージのつらい試練に対しても泣けてきましたが、何よりも「I'll Find You My Friend」(「見いだそうマイ・フレンド」)の曲を聴いた時、伝道中の思い出も重なって、あふれ出る涙を止めることができませんでした。そんな私の姿を見て泣いてくださった方もいて、とてもうれしく思いました。そして感動の気持ちに浸っていたら、今度は一緒に歌おうという、うれしい誘いを受けたわけです。

それからというもの「セージの歌」を通して再び私の伝道が始まりました。自分の所属ワード部である高畑ワード部の公演には私の学生時代の友人が3人来てくれて、その中のひとりは今宣教師から福音を学んでいます。また最後のクリスマスコンサートでは、1,000人の教会員以外の人に聴いてもらうという目標を達成するためにあと111人の入場者が必要であり、私も至る所で呼びかけました。そして当日、私の方からは妹夫婦をはじめ6人の知り合いが来てくれて、結果的には全部で目標を超える202人の入場者があり、17回のコンサートの累計で1,000人以上の会員以外の方が訪れてくれました。本当に「すばらしい！」の一言です。

私は「セージの歌」の活動を通して永遠の友達にもたくさん巡り会うことができ、心から感謝しています。また、毎回各地で歌うことにより、自分自身のイエス・キリストに対する証も強くなりました。主は私の痛みを本当にわかってくださいます。私がこうして再び教会に集えるようになったこと、また私が教会へ戻ることをあれほど心配し、反対していた家族が、今では好意的に見守ってくれていることは、まさに奇跡としか言いようがありません。

このセージのコンサートを企画してくださった^{にしはらゆうじ}西原雄二兄弟、またスタッ

フの方々に本当に感謝しています。

この福音は真実です。私はこれからも神様からいただいた賜を最大限に生かしながら、楽しい福音の毎日を送っていきこうと思っています。

最後に、私の大好きな言葉を、この証を読んでくださったすべての方々にプレゼントします。「愛は愛を生む。」(しょうじ・あつこ ワード部伝道委員)

あの人たちと一緒に歌いたい



名古屋西ステーク高畑ワード部
所 典子

初めて「セージの歌」と出会ったのはまだ求道者の時、第1回公演の行なわれた福德ワード部でのことでした。福音について、あまりよくわかっていない私でしたが、スライドを見て1曲目の『家族は永遠に』を聴いていたら、涙が出てきました。そのころ一緒に住んでいた祖母が亡くなって、

家の中に何か穴が開いてしまったような感じでいたのですが、教会の雰囲気、そして歌の中から形に表わすことのできない何かとても心温まるプレゼントをいただきました。そして、イエス様の尊い愛を教えてもらいました。

もともととおおぜいの人たちと歌うことが大好きで、いろいろなコーラスに参加してきた私は、「セージの歌」というとてもすばらしい公演活動をしている人たちの中に自分も入って一緒に歌いたいと思いました。今すぐにあの人たちの仲間になって、彼らと同じ所に立って、一緒になって歌いたいという気持ちでいっぱいでした。そして、その1カ月後くらいに私はバプテスマを受け、念願の「セージの歌」の仲間のひとりとなりました。

教会員になったばかりの私にとって、伝道は、とてもむずかしく感じました。聖典の中にあるすばらしい聖句を挙げて友達や家族に伝えるのは、勉強不足の私にはとてもむずかしいことです。でも、大好きな音楽で福音を伝えることなら、私にでもできると思いました。それに、多くの友達と一緒に伝道するという大きな助けがあることも私の支えでした。ひとりでは何もできない私ですが、大好きな友達と大好きな音楽で福音を伝えることができたのは、とても幸せでした。

教会員でない友達を「セージの歌」に招待し、「すごくよかったよ」と何人も友達から言われました。その中

のひとりが、バプテスマを受けて、永遠の友達となりました。私がもらったとおおぜいの人たちの愛を友達にプレゼントできたことが、とてもうれしかったです。

人の心の中に残る文章や口からすぐ出てくる文章は、なかなかないと思います。でも音楽は違うと思います。何か気に入った曲があれば、歌詞がわからなくてもメロディーだけでも、いつの間にか自然に口ずさんでいるものです。言葉とは違う意味で、理屈なく音楽は、人の心にしみ渡るものだと思います。私にとって音楽での伝道活動は、人に福音を伝えるのに最大の方法です。そして何よりも音楽を愛しているから自信をもってその方法でできます。

「音楽は精神の中から、日常生活の汚れを取り除きます」というヨハン・セバスティアン・バッハの言葉があります。人の心の中にすぐ入ることができ、ある時は温かな気持ちにさせてくれ、またある時は大きな力を与えてくれます。福音と音楽はどこか似ているような気がします。

これからも音楽活動は続けていきたいです。音楽によって、多くの人たちと友達になれたから……。そして、福音を知っている人、知らない人というのは関係なく、分かち合える時が持てるから……。音楽というすばらしいプレゼントをいただけたことをとても感謝しています。(ところ・のりこ 扶助協会ピアニスト)

ブックセンターからのお知らせ

1. 新輸入品の紹介

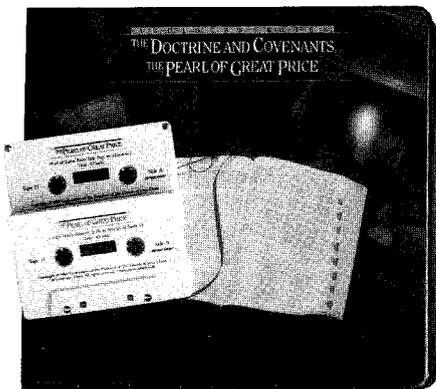
「教義と聖約／高価なる真珠」
カセットテープ(英語朗読)
カタログ番号 52212
全12巻 1,800円 ケース入り

教義と聖約／高価なる真珠のすべての章を収録しています。今年度の教科課程である教義と聖約を学ぶうえで、また英語の聖典を直接学ぶうえでも効果的です。

2. 価格改定

「モルモン経」
カセットテープ(英語朗読)
カタログ番号 52047
全18巻 2,600円 ケース入り

1993年3月25日付で、価格を3,000円から2,600円に改定します。



2月に 召された 専任宣教師

第163期生10人



後列左から1-6, 前列左から7-10

お知らせ

役員の変動

1993年1月8日から1993年2月3日までに管理本部会員統計記録課に通知のあった役員の変動(敬称略)

●名古屋伝道部福井地方部武生支部

新支部長: 近藤忠男

(前任者: 北川邦茂)

●神戸伝道部関西支部(英語)

新支部長: Christopher Murphy

(前任者: Dan Willis)

●岡山伝道部山口地方部山口支部

新支部長: 吉岡公夫

(前任者: 高森弘志)

〈名前〉

1. 橋本志保
2. 田中葉月
3. 宮本百合子
4. 大神田光代
5. 藤村あゆみ
6. 滝沢 恵
7. 籠田のり子
8. 新木 智子
9. 高橋良尚
10. 伊賀 聖

〈出身地〉

- 横浜S/横浜第2W
 大阪東S/茨木第1W
 仙台M/青森D/青森B
 沖縄那覇S/首里W
 仙台S/長町W
 東京北M/長野D/長野B
 福岡S/佐賀B
 我孫子S/松戸W
 仙台M/青森D/青森B
 札幌S/豊平W

〈伝道地〉

- 札幌伝道部
 東京北伝道部
 岡山伝道部
 仙台伝道部
 東京南伝道部
 大阪伝道部
 東京南伝道部
 岡山伝道部
 東京南伝道部
 東京南伝道部

S:ステーキ部, M:伝道部, D:地方部, W:ワード部, B:支部

編集室から

皆さんの原稿を 募集しています

▶ローカルページでは以下のような原稿を募集しています。また、以下のような証のある方のご紹介も歓迎します。

- ①どのようないきさつで改宗したか。
- ②日々の生活に福音の原則をどのように応用しているか。またそれによってどのような祝福があったか。
- ③教会員として職場や学校でどのような努力をしているか。また、信仰をど

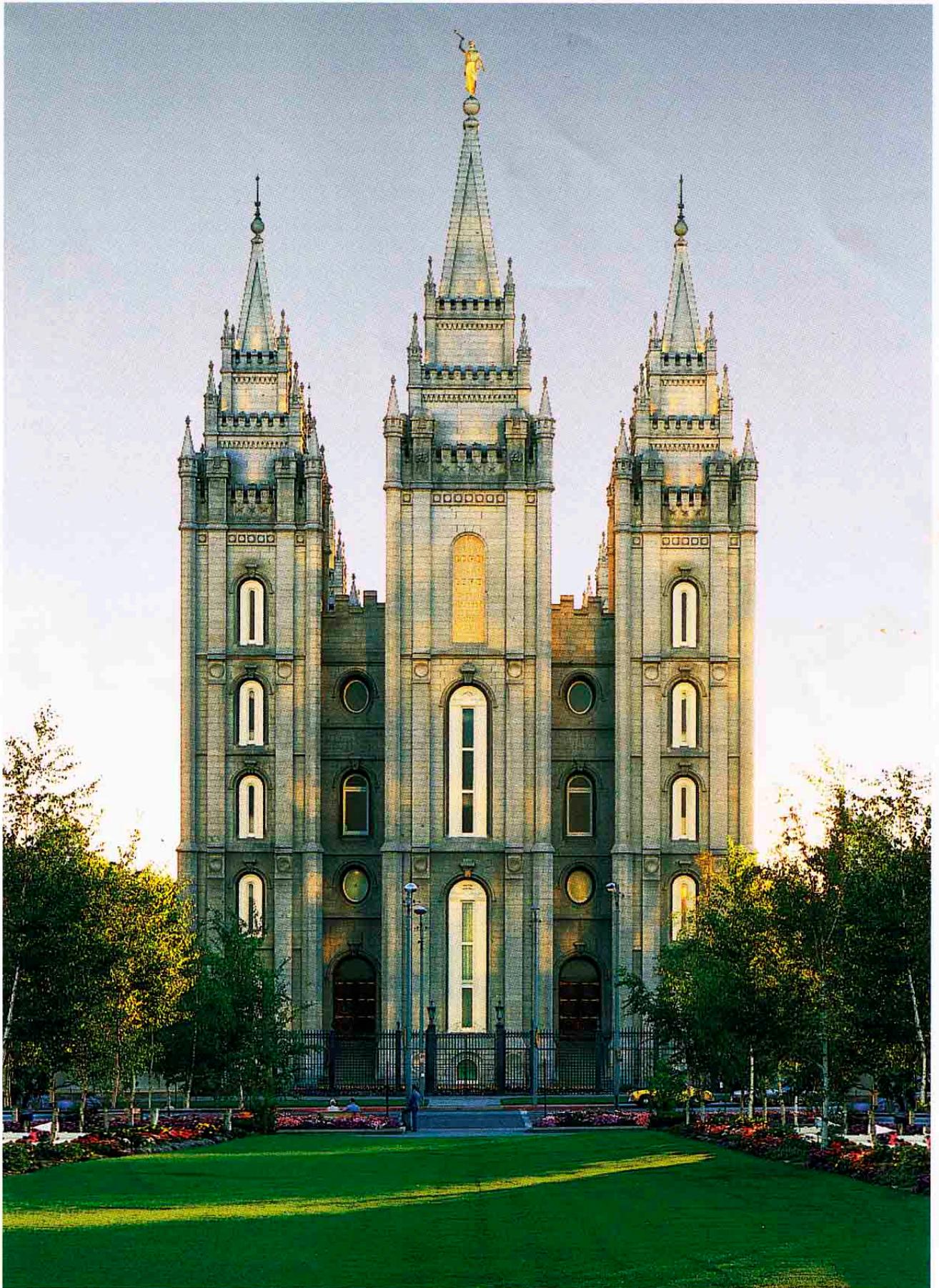
のように生かしているか。

- ④友人や周囲の人にどのように福音を伝えているか。
 - ⑤お休み会員にどのように手を差し伸べているか。
 - ⑥一度お休みした人がどのようないきさつで教会に戻って来たか。
 - ⑦伝道に出るに当たりどのように準備し、障害を克服したか。また、専任宣教師になって得た証。
 - ⑧神殿参入や家族の記録を作成するに当たってどのような助けや祝福があったか。
 - ⑨その他。(家族の証、ワード部/支部特集など)
- ▶現在ローカルページでは証の著者の

生年を記載していませんが、編集作業の参考のため、投稿の際には連絡先(住所、電話番号)、教会での責任(役職名)、所属ユニット名と併せて生年を記入し、写真を同封のうえお送りください。

▶お送りいただいた原稿は一部手直しさせていただくことがあります。また、掲載されるまでには若干時間がかかる場合もありますのであらかじめご了承ください。

▶あて先: ☎150 東京都渋谷区桜丘町28-8 末日聖徒イエス・キリスト教会「聖徒の道」編集室
 電話03(5489)9251
 ファクシミリ03(5489)9254



聖徒たちは、ソルトレーク神殿の建築に40年以上の歳月を要した。

今月は、同神殿が1893年4月6日、ウイルフォード・ウッドラフ大管長によって献堂されてから100周年に当たる。



集う場所が礼拝堂であるか賃貸の建物であるかにかかわらず、「地球の真ん中」に住む聖徒たちは、異口同音に証している。「福音は生活にすばらしい変化をもたらした」と。(本誌「エクアドル」pp. 32-41参照。写真撮影ドン・L・サール)